

# 鞠智城の変遷

向井一雄

## 1. はじめに

日本の古代山城は7世紀後半に築かれたと考えられているが、いずれも8世紀に入ると廃城となったため、律令国家成立後は維持されていない。ところが、九州の三城一大宰府近傍の大野城と基肄城、そして肥後の鞠智城については9世紀後半まで記録が散見され、およそ200年の長きにわたり維持・運営されていたと考えられている。

鞠智城の創建については、築城記事を欠くためもあって、これまで多くの先学によって様々な視点から論じられてきた。その特異な立地・占地状況からも築城目的や機能が通常の古代山城とは異なるとする意見も多い。また長期間維持された理由についても、時代によって城の機能・性格が変遷したとする議論も行われている。

筆者は1991年に西日本の古代山城に関する総論を発表し、鞠智城についても若干の意見<sup>(1)</sup>を披露したが、拙稿の内容が古代山城全般に関わるため詳論できてはいない。また熊本県による鞠智城調査が進む以前であったため、構想段階に留まっている感は否めない。本稿では、一昨年発刊された報告書『鞠智城跡Ⅱ』

(以下、『報告書』と呼ぶ)の調査成果をベースに、主に鞠智城の造営の画期を中心として、鞠智城の変遷過程を考えてみたい。

## 2. 研究史

鞠智城はその築城目的を「対外防衛用の山城と捉える」説と「対隼人など南九州支配の拠点とする」説が対立してきた。その立地が、大宰府から62kmもの南方に、それも菊池川を30kmも遡った内陸部にあることから、対大陸用の防衛施設であることを訝しがする意見は未だに根強い。この問題は、米原遺跡を鞠智城として最初に報告した坂本経堯が鞠智城の役割として二説を併記する形で予見している<sup>(2)</sup>。当初は大野城や基肄城との関連性から、鏡山猛、島津義昭など対外防衛用の山城と捉える説が主流だったが、対大陸説でも「有明海からの侵攻に対する城とする」説、大野城など前線の防衛ラインへの「補給基地とする」説、大宰府陥落後の九州の反抗拠点—いわゆる「第二大宰府」説<sup>(3)</sup>など、鞠智城の変則的な立地をなんとか合理的に説明しようとする傾向がみられる。

鞠智城の占地する米原台地は最も高い西側丘陵上で標高169m、周辺平地からの比高差は100m程度で、大野城などが400mクラスの山地に占地しているのと比べ、“鞠智城は低い”というイメージが強い。この立地する丘陵の低さも防衛施設としてそぐわないとする印象が増すことになり、東北地方の古代城柵との立地の類似性やコの字形配置の官衙的な建物群の検出などから、岡田茂弘らによって「対隼人南九州支配拠点」説が唱えられている<sup>(4)</sup>。

古代山城を地方支配の拠点とする考え自体は、出宮徳尚が早くに提唱しているが<sup>(5)</sup>、古代山城＝対外防衛用の軍事施設と捉えるステレオタイプな山城観が大勢を占めている日本では未だ少数派といえる。しかし韓国における城郭観では普遍的な見方でもある<sup>(6)</sup>。韓国の山城を“逃げ込み城”と捉える日本の研究者は多く、彼我の古代山城論において微妙な、しかし極めて根本的な見方の相違を生じさせている。

交通路との関係は早くから注目されており、鞠智城が「車路」と呼ばれる直線道で肥後国府と結ばれていることを木下良が指摘している<sup>(7)</sup>。延喜式駅路が玉名・江田方面から肥後国府へ南下して、鞠智城と離れ

ている点も對外防衛説の弱点だったが、鶴嶋俊彦によって、山鹿方面から鞠智城南側に「車路」「車町」などの地名が断続的に続くことが確認され<sup>(8)</sup>、延喜式以前—奈良時代、それを遡る7世紀後半の築城期には駅路が鞠智城の南辺を通過していたことが明らかとなっている。この古駅路は一方は木下の指摘した直線道で国府方面へ、もう一方は阿蘇から豊後方面へ抜けており、鞠智城はその分岐点・交通要衝地に立地している。最近の調査では古駅路に沿って官衙や寺院があることも判明しつつある。

最近の傾向としては、鞠智城は段階的に性格や機能が変化したとする考え方が唱えられるようになっており、多くは對外防衛用から南九州支配拠点へと変化したと説く<sup>(9)</sup>。いわば対大陸用と対隼人用の折衷説であるが、主要なそして表向きの目的が對外防衛用であったとしても、古代山城を築城するという一種のイベント自体が地域支配という側面を少なからず持っている<sup>(10)</sup>。對外防衛用、国内支配用と二択に拘泥する研究姿勢自体が、古代山城が持つ築城背景に関する重要な情報を見落とすことになるかもしれない。

### 3. 城郭の占地と構造—いくつかの問題点

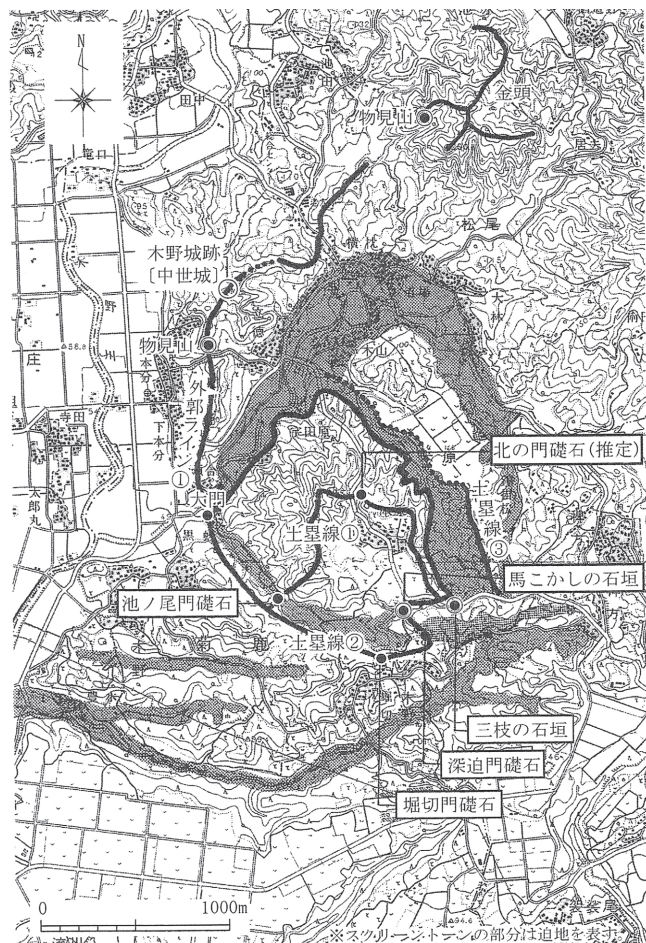
次に鞠智城の構造について、占地・縄張りから城壁の構造、城門、内部施設まで、総合的に考察を加え、いくつかの問題点を指摘したい。特に内部施設に関しては、建物跡と出土瓦を対象にさらに再検討する必要性を感じる。最後に、周辺遺跡の動向における興味深い事象を取り上げて鞠智城の前史についても考えてみたい。

#### (1) 大外郭—いわゆる広域説と複郭構造

##### i. 鞠智城の占地

鞠智城で現在遺構が確認されているのは米原台地上に限られ、周囲およそ3.4kmで3ヶ所の城門と西側丘陵上から南辺の土塁線、その内部には建物群が発掘調査によって確認されている（これを内城と呼ぶ）。問題は坂本経堯や乙益重隆らによって想定されている広域説とその根拠となる大外郭の方で、池ノ尾門を出た西側から北東方向へ米原台地の周囲を取り囲むように丘陵が弧状に伸びている。この丘陵上に切り落としの土塁があるのではないかとわれてきたが、明確な遺構は確認されておらず、考古学的には大外郭の存在は否定的な材料が多い。丘陵南端の切れ目—頭合集落には「大門」という意味ありげな小字地名もあるが、付近に目立った遺構はなく現在まで調査されたことはない。

鞠智城の南方に眼を転じてみると、うてな台地と呼ばれる平坦な段丘が広がり、台地北辺は小河川による支谷が西方から入り込み、南方から鞠智城に向かおうとすると段丘崖と狭い浸食谷がいわば自然の防衛ラインを形成



第1図 鞠智城城域図



している。段丘の縁辺部は比高40～50mの急崖となって登ることは難しく、狭い支谷に分け入っても左右の台地上から挟撃される怖れがある。このような高低差がなく見通しのきかない地形は迷路的な効果も持っており、低丘陵だからといって攻めやすいわけではない。現在、菊池市方面から整備された自動車道で城跡を訪れた場合、“鞠智城は低い”というイメージを持たれるだろうが、西方の頭合から池ノ尾門を目指して登城するならば、北側に延びる想定大外郭の丘陵と米原台地西側丘陵が眼前に迫り、“堅固な山城”としてイメージチェンジを余儀なくさせられるだろう。

## ii. 複郭構造について

鞠智城とは反対に対大陸の最前線に築かれた対馬金田城において、鞠智城と類似した大外郭プランの存在を窺うことができるのは偶然ではないだろう。金田城は対馬の上県と下県の間一リアス式の浅茅湾中央部を望める城山（標高276m）に占地している。城山の東側斜面の水門部（一～三の城戸）は黒瀬湾に面しており、湾への入口は唯一つで「細り口」という狭い小海峡状を呈し、対岸の鋸割岩からも見下ろされる。城山の西側斜面は急傾斜でこちらからの攻撃はむろん困難だが、黒瀬湾側も幅90mの細り口の海路さえ閉ざせば、外部からの侵入は容易ではない<sup>(11)</sup>。石塁が廻る城山の2.8kmが内城、黒瀬湾を取り囲むラインが外城となる。鞠智城の場合、米原台地の城郭が内城、西から北の丘陵と南側のうてな台地の段丘崖と浸食谷が外城に当たるわけで、「複郭構造」となっていることがわかる。いずれも外城には明確な遺構は見つからないが、弱点となる開口部を押さえれば、前進陣地たる外城の役目は果たせると考えられる。

内城－外城を持つ複郭構造は、実は日本の古代山城ではよくみられるプランである。鬼ノ城の場合、内城の東南麓の阿曾の谷の入口に小水城状の土堤遺構（長さ約300m、幅21m）が谷を塞いでいる。屋嶋城では屋島の南嶺・北嶺間の浦生の谷に大石塁（長さ約90m、幅9m）が築かれているが、この石塁も左右の尾根には伸びず、単独で存在している。鬼ノ城や屋嶋城の場合は外城の谷入口を遮断する施設を設けた事例といえるだろう。外城の入口を遮断する施設を持たない事例はさらに多く、播磨城山城、石城山城、大廻小廻山城、永納山城、御所ヶ谷城などで同じような縄張りプランを指摘することができる<sup>(12)</sup>。韓国の百濟最後の都城である扶余（泗沘）の羅城プランはよく知られているが、百濟五方城<sup>(13)</sup>に比定される洪城・鶴城山城（西方城/任存城か？）や古阜・古沙夫里城（中方城/周留城か？）でも、城郭遺構を残す内城と地表遺構を伴わないが巧みに地形を利用した外城から構成される複郭構造を指摘することが可能で、築城技術者の戦術－天智紀にいうところの“兵法”と捉えることができるかもしれない。

## （2）内郭城壁の構造

西側の丘陵上から池ノ尾門のある谷部を越えて南辺の丘陵を通過して堀切門、深迫門までは城壁線がほぼ確認されている。深迫門から北では米原台地東端の崖線を利用して、城壁はなかったと想定されてきたが、今後の調査で何らかの施設が見つかる可能性もあろう。調査当初、鞠智城の城壁は盛土ではなく切り落としだと考えられていた。土塁の流出、崩壊が激しかったのと発掘面積が狭かったことによる。

日本の古代山城の城壁は版築土塁が多い。従来は版築土塁基底部に列石を持つタイプ＝神籠石系、列石を持たないタイプ＝朝鮮式と考えられてきたが、調査の進展と共に、大野城や鞠智城のような朝鮮式山城でも土塁基底部列石が存在することが明らかになってきた。また列石は土塁盛土の土留めだといわれてきたが、版築土塁・築地の復元などを通じて基底部を雨水や霜害から保護する目的が重視されつつある。土塁の形態は、A類：夾築法で城壁高が高いタイプ、B類：内托法で低い土段状のタイプ、C類：内托法で土段状だが城壁高は比較的高いタイプの三種に分けられる<sup>(14)</sup>。

鞠智城の土塁構造は基本的に大野城と類似しており、土塁基底部に列石を配してその内外に柱を立てて版

築土塁を構築している。最初に確認された南側土塁線では列石が接して置かれているのに対して、西側土塁線では列石間に隙間があるなど、場所によって様々な工法が採られている点も大野城の調査結果と通じる。深迫門西側部分では土塁・列石前の敷石とそれを覆う外盛土も検出され、これも大野城との類似工法の一つといえよう。土塁の形態については旧態を残す部分が少ないため一見B類のようにも見えるが、元はA類の夾築型に近かったと推定される。土塁内外の柱穴列の間隔は約1.6mで柱間隔が短いグループに属し、築造年代を考える上でこの点も注意される<sup>(15)</sup>。

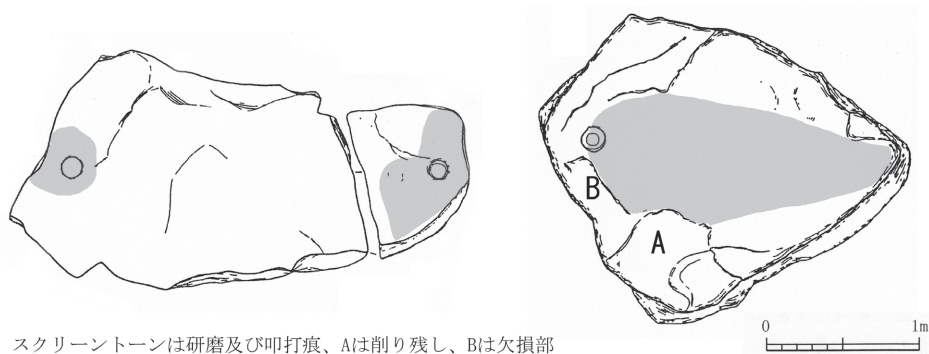
南側の城壁は尾根筋のピーク毎に屈曲し、調査面積がトレンチ調査であるため詳しい構造は不明なものの、自然地形に手を入れながら版築造成を行って、横矢掛け装置である「雉城」を複数設けている。南側城壁は凝灰岩層の崖上にあつて地形的に容易に登ることはできそうにないが、この部分が西方からの支谷沿いの侵入路に当たることから、嚴重な防御を敷いていると考えられる。築城後に大きく修築を行った箇所はなさそうで、現在見る土塁が初築時の構造をほぼ残していると考えられる。

### (3) 城門

鞠智城の城門は城域の南側に3ヶ所確認されている。いずれの城門も門礎石は原位置から動いているため、門建物の構造の把握は難しい。城の北側にも谷川沿いに1ヶ所一城門が推定されているが、門礎石などの遺構は未確認である<sup>(16)</sup>。

#### i. 城門遺構について

堀切門では発掘調査の結果、地山・岩盤の削り出しによる城壁と道路遺構が検出され、門礎石の原位置を示すと思われる堀方と柱穴も僅か1個だが上位のテラス状平坦面で確認された。堀切門の門礎石は2石に割られて原位置から動かされていたが、現在は接合して保存・公開されている。1枚の板石に軸摺穴が2つ存在する門礎石は珍しく、両軸摺穴間の距離は約2.8m、門柱間は約3.2mをはかる。軸摺穴の左右に挟り加工が認められ、掘立柱の門柱が立っていたと考えられている。軸摺穴の内壁には軸摺金具の鉄錆といわれてきた赤色痕が薄く残っているが<sup>(17)</sup>、軸摺穴の周囲と門柱の挟り部分は研磨加工がなされ、軸摺穴の底部は扉軸による摩耗によって滑らかになっており、軸摺穴の直径が16cm、深さも15cmと深いことから扉軸がそのまま挿入されていたことが想定される。



第2図 鞠智城 門礎石 (左：堀切門、右：深迫門)

深迫門周辺は段々畑として開墾され、門礎石も原位置からずり落ちて半ば埋没した状態で1個だけ残されていた。開墾による遺構の毀損が激しく、柱穴などによって建物の規模を明らかにすることはできていないが、両側から門へ下る版築土塁の範囲から門幅は6～7m、奥行は9m程度以内と推定されている。門礎石は軸摺穴の縁周辺が割れて破損しているものの、礎石の中央部には広い面積で叩打痕があるため、この部分が扉の開閉箇所と考えられる。堀切門のような掘立柱を添える挟り加工はみられないが、軸摺穴に接する位置



に掘立柱の門柱が立てられ、亡失したであろうもう一つの門礎石とセットになって城門礎石を構成していたと想定できる。本礎石を礎石建て用とする推定もあるが、首肯できない。

池ノ尾門は鞠智城の中で最も低い位置（標高90m）にあり、狹隘な谷部に位置する。調査前には谷部に設けられたであろう城壁と城門の位置は判然としなかったが、谷部に設けられた調査区の全面で崩壊した石塁が検出された。谷を塞ぐ石塁は鞠智城では初めて確認された遺構で、石塁の前面は崩壊が激しいものの背面は基底石や石積みが残存して、石塁の幅は約9.6mと推定されている。石塁背面側では暗渠状の通水溝及び取水口とその手前では導水溝も検出された。現在の市道や河川部分に城門が存在したと考えられるが、確認はできていない。貯水地北方の谷川沿いの石塁の有無については今後の調査が待たれる。

## ii. 城門への登城ルート

鞠智城の南側には延喜式以前の古駅路が通過しており、この駅路から南辺城壁の三城門へ接続する支路の解明が課題である。鶴嶋は、山鹿方面から鹿本条里区に沿って進んでくる古駅路がうてな台地にぶつかる(ト)地点から東方へ浸食谷を進む登城ルートを想定しているが<sup>(18)</sup>、この浸食谷は堀切集落手前で谷奥の崖となっている。古駅路(テ)地点から菊鹿条里区の南端ラインを進んだ頭合から池ノ尾門に入るルートがメインの登城ルートと考えるべきだろう。鶴嶋が想定するうてな台地を斜めに横断する駅路が十連寺廃寺から台地を下った後、東進して菊池市街に入る手前に立石の小字がある<sup>(19)</sup>。この立石から北方へ直進して迫間川を渡河した袈裟尾集落からさらに尾根伝いに北進すると稗方集落南方の一寸榎（標高167m）に達する。ここから深迫門に入るルートが西からの登城ルートになる。



第3図 鞠智城周辺の条里

城門の構造的には、堀切門はS字にクランクさせる導線設定をしており、城門開口部の左手には雉城状の突出した尾根が取り付く極めて防御的な縄張りとなっている。深迫門も堀切門とよく似た左手に雉城状の尾根が付く地形になっており、池ノ尾門は左右の尾根上から強力な横矢を掛けられる。堀切門の場合は前面が凝灰岩層の急崖となっていて、懸門<sup>(20)</sup>であった可能性もあろう。池ノ尾門と深迫門は全体の地形から平門式の門構造と考えられ、先の登城ルート of 想定からも内城へ入る東西からの主要な城門だったと思われる。

#### (4) 内部施設

鞠智城城内には72棟に及ぶ建物跡、貯水池などが確認されている。次に、各遺構とそれに関連する瓦などの遺物、貯水池跡で発見された木簡や銅製仏像などの特殊遺物について考察を加えたい。

##### i. 建物跡

###### ① 鞠智城建物群の変遷案

鞠智城の建物跡は内城域の北半、現在の米原集落南側の長者原の台地上に集中している。調査は広範囲に及び建物群の全体像がほぼ解明されている点は、国内の古代山城の中でも特筆される。調査成果によれば、建物種別にいくつかのゾーン形成がなされていたと考えられている。建物群の時期変遷については2010年頃からいくつかの案が提起されてきたが、今回の『報告書』で熊本県としての変遷案が固まったといえよう。機能による配置や建替えに注目して時期変遷を検証しており、第Ⅰ～Ⅴ時期の変遷がまとめられている。

第Ⅰ期：鞠智城の創建期の建物群で、長者山東麓から長者原中央に向けて地形に沿って細長く配置される。全て掘立柱建物で主軸を東西方向に向けるものが多く、側柱建物がほとんどを占める。

第Ⅱ期：7世紀末の緒治期に比定される建物群で、第Ⅰ期の建物と同じ場所での建替えの他に長者原東側で主軸を南北方向にとる建物群が出現する。この段階も全て掘立柱建物で側柱建物が多い。

第Ⅲ期：第Ⅱ期の建物の建て替えで小型礎石の礎石建物が増える。8世紀前半代に比定されている。

第Ⅳ期：大型礎石を伴う建物群が出現する。第Ⅱ期から出現した長者山北麓の建物群と長者原東側の建物群が中心となって、8世紀第4四半期～9世紀第3四半期まで活発な建設が行われる。主軸は南北軸が中心で総柱建物が多くなる。

第Ⅴ期：鞠智城の終末期の建物群で長者山での建設を最後として終る時期。10世紀第3四半期を下限とされる。

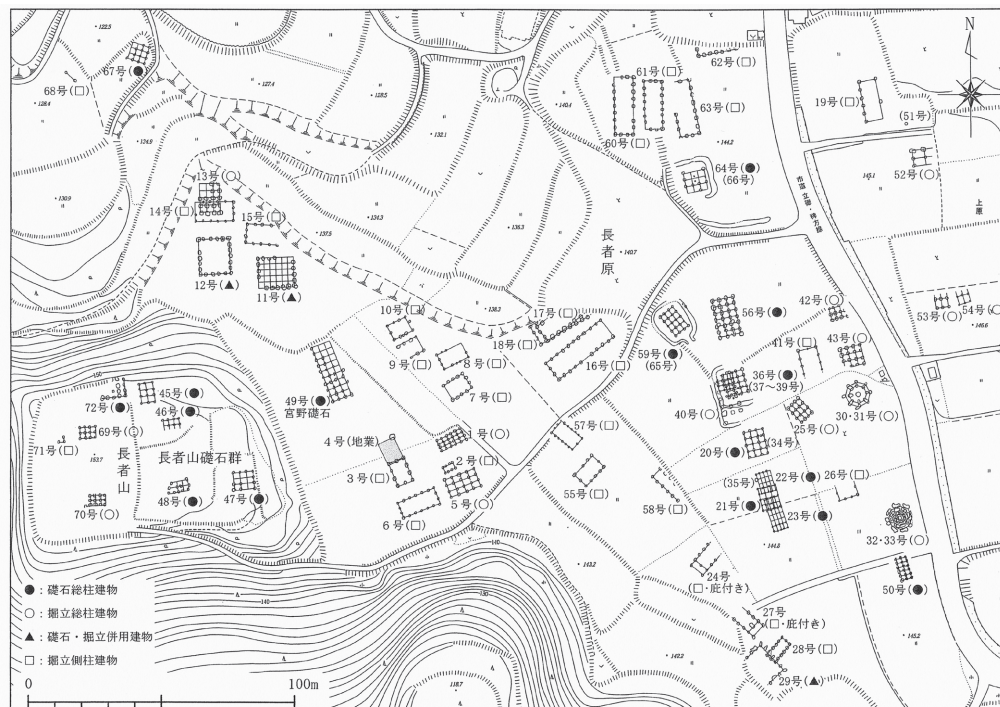
同じ場所での建替えが何度も行われているのが鞠智城の特徴であり、築城から廃城までの期間の短い金田城、鬼ノ城、高安城などでは建替えによる重複遺構はなく、創建期の単独遺構のみである。建替え・遺構の重複が認められる大野城では同じ場所での建替えよりも城内の異なる場所への増築によって建物数が増加している。基肆城は発掘調査された建物が少ないため明確ではないが、現在までの調査では重複遺構の検出はなく、大野城と似た状況と推測される。

大野城や基肆城、高安城、鬼ノ城などについては3×5間、もしくは3×4間、3×3間といった規格性を持った建物プランが各々の城で採られており、規格性という点では鞠智城は若干緩い傾向がみられる。通常の郡衙倉庫が平面積30㎡であるのと比べて古代山城の倉庫は大きく、特に大野・基肆城で採用されている3×5間の総柱礎石建物は60㎡とひととき大きい。設計に使用された尺度は、大野城では天平尺(29.6cm)よりも若干長く国分寺建設期の29.9尺と合致する。鬼ノ城では前期難波宮使用尺(29.2cm)と合致する柱間が指摘されており、鬼ノ城と大野城倉庫の年代的な相違が尺度面からも窺える<sup>(21)</sup>。

郡衙の場合、倉庫建物が掘立柱→礎石建へ変化するの、全国的には8世紀後半(第4四半期以降)からで、それと比べると古代山城での礎石化は早い傾向にある。鞠智城での礎石建物の初現は『報告書』によ



れば8世紀前半とされるが、規格性や使用尺度からみると、8世紀後半代の可能性も残る（建物跡②でさらに検討）。8世紀初頭に、大宰府政庁や水城の東西門、大野城の太宰府口城門などが掘立柱から礎石建てに建替えられているとはいえ、7世紀後半に造られた大野城や基肄城城内の掘立柱建物が一斉に礎石建てに改築されたとはいえない。



第4図 鞠智城 建物遺構配置図

小西龍三郎は『報告書』の中で、側柱建物の性格を、屋＝穎倉と捉えられているが、「正税帳」などによれば、穀倉に比べて穎倉における屋（側柱建物）の比率は高いものの、それは穎倉の15%程度であり、穎倉の主体は総柱建物である。また、屋の穎倉としての利用は時代的にも下るので、鞠智城の側柱建物が穎倉であるという評価は再検討が必要だろう。

鞠智城の建物群には区画施設が設けられていない<sup>(22)</sup>。管理棟的建物と指摘されている長者原北側のX区で溝と柵が検出されているが、機能や性格ごとに建物群を区画する郡衙遺跡などに比べて区画が少なくかつ貧弱である点は否めない。この点は他の古代山城でも同様であり<sup>(23)</sup>、建物群の立地する地形（尾根筋など）を一種の区画と見なしている可能性が高い。

## ② 建物時期推定の問題点

### A. 時期推定の手掛かり

『報告書』によると、建物の時期推定について以下のような方法が用いられているが、異なる推定方法を並列的に採用している。これは年代を決定できる資料が少ないため致し方ないが、手がかり（証拠）としての優先順位を決めておかないと、矛盾も起こるし判断が恣意的になる恐れがある。

- ①遺構の切り合い関係：最も信頼できるが、③と同じ問題（遺構間の時期差）は残る。
- ②建物の軸線：最も容易であるが曖昧でもあり、埋没したり削平されて消失した建物については資料化できない。
- ③柱堀方からの土器：ある程度は有効だが、どのくらい当該建物の建設と時間差があるかは不明である。
- ④C14年代：炭化物からの年代推定だが、暦年代とのズレが補正しづらい。

⑤建物プランや礎石の大小・石材の材質：①と組み合わせて小型礎石→大型礎石への変遷が想定されている。

## B. 長者原地区の層位

過去の年度の『鞠智城跡―第18次・19次報告書』で確認してみると、鞠智城の建物群について、層位関係が確かめられたのは56号建物や65号建物の調査時であり、この調査以降、土層(整地面)に注意して調査がなされている。建物群発掘の当初、最下層の褐色ローム土(地山)で遺構が検出されていた点に留意しなければならない。

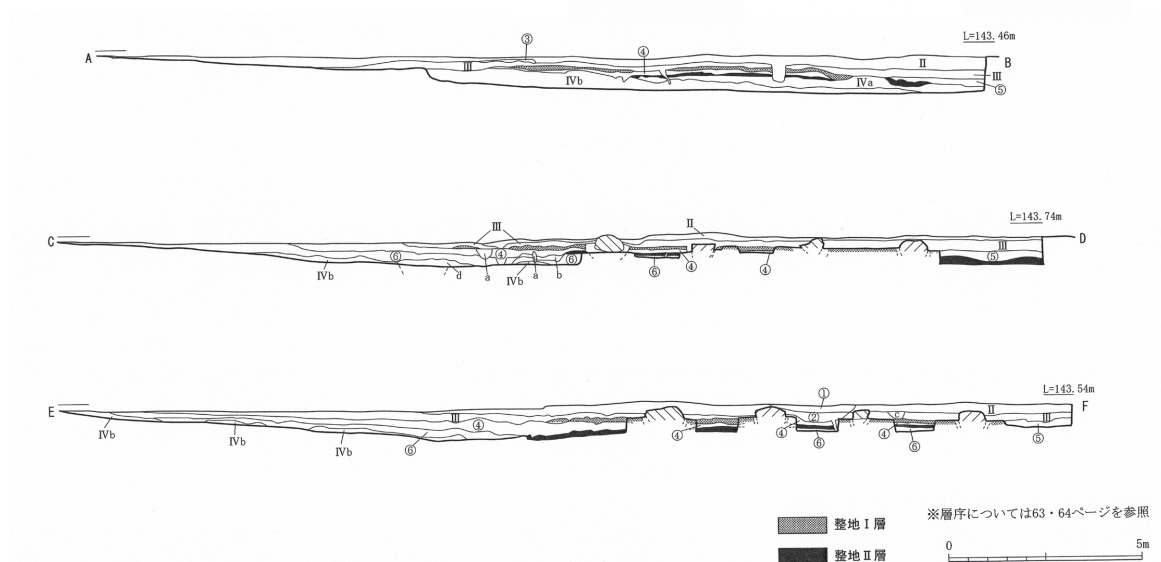
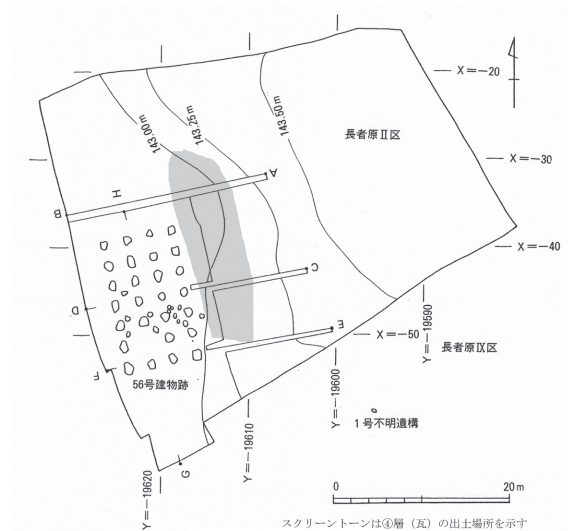
56号の整地層は二つあり、下層が当然古いのだが、問題はこれらの整地層をいつの時期に比定するかである。

整地Ⅰ(上層)

④層(黒色土層)

整地Ⅱ(下層)

褐色ローム(Ⅳab,Ⅲ)



第5図 鞠智城56号建物跡と④層遺物出土状況、土層断面図

まず一番下の褐色ローム(Ⅳab,Ⅲ)について、掘立柱建物の大半がこの層位から堀方の柱の底が検出されており、上層が開墾などで消失した地点ではこの層が検出面でもある。次に整地Ⅱであるが、この土層の包含遺物は整地Ⅱより下の建物に伴うものといえる。④層の下層に整地Ⅱがあり、④層には7世紀後半～9世紀の遺物含まれるので、整地Ⅱの建物が第Ⅱ期(繕治期)に当たる。軒から落下した瓦が④層でまともに出土した56号下層建物(想定)は整地Ⅱの建物なので、やはり繕治期と考えた方がよさそうである。40号建物は整地Ⅱに埋没していたとされ、7、6号溝の下に埋もれていた。柱の抜き取り痕もあり38号建物(掘



立柱)よりも古い。整地Ⅱより下層の40号建物は第Ⅰ期(創建期)と想定して問題ないだろう。

40号建物→38号建物・56号下層建物

整地Ⅱより整地Ⅰが新しいから、単純に整地Ⅱ＝7世紀末、整地Ⅰ＝8世紀代とはできない。整地Ⅰは、整地Ⅱ上の建物の遺物を整地したものであり、整地Ⅰの遺物の年代で最も新しいものが8世紀末～9世紀であるならば、少なくとも整地Ⅰ上に建つ建物は8世紀末以降となる。厳密には、整地Ⅱが第Ⅱ期(繕治期)の整地なのか、8世紀末以降の第Ⅳ期(復興期)の整地なのかは、④層に9世紀の遺物が含まれるため判断が難しい。整地Ⅱ上の56号下層建物は想定であり遺構が確認されていないので小型礎石建物なのか掘立柱建物なのかもわからない。大型礎石が整地Ⅰ上にあることは59号建物や22・23号建物から明らかなのだが、59号下層の65号建物や22・23号下層の21号建物は整地Ⅱに伴うものではなく、ほぼ同レベルにある。整地Ⅱより上層の建物として、56号建物と59号下層の65号建物が同時期と考えられている。

56号下層建物→59号下層65号建物・56号建物→65号建物

④層は7世紀後半～9世紀の遺物を含むとされているが、問題は8世紀代の遺物がどのくらい含まれるかどうかである。これは貯水池の状況とも似ている。整地Ⅰを8世紀末～9世紀だとする推定は、整地Ⅱ上層の④層に9世紀代の遺物が含まれるのも傍証になる。そうすると、整地Ⅰ上の36号建物や56号建物は整地Ⅰよりも後、9世紀後半代の建物(鞠智城では最末期の建物)となりそうである。

65号建物→36号建物・56号建物

層位と年代をまとめると次のような想定が妥当であると思われる。

整地Ⅰより上層：9世紀後半

整地Ⅰ(上層)：8世紀末～9世紀

整地Ⅱ(下層)：7世紀末～8世紀

褐色ローム上：7世紀後半

### C. 破壊・消失した建物遺構の問題

もう一つ解釈が難しいのは49号建物(宮野礎石群)の溝から出土した瓦で、49号に伴うものとすれば8世紀末以降の再利用となり、49号に下層建物があるとすれば、整地Ⅱ相当の7世紀後半代となる。礎石建物は瓦葺きだったという先入観がありそうで、小型礎石→大型礎石の変遷を整地Ⅰ→整地Ⅱに検証なしにトレースしているきらいもある。

旧地形を復元すると長者原東側の礎石建物群が低地にあることわかる。長者原西側については礎石建物が開墾など(1967年の開田事業)で削平され消失した可能性も大きい。長者原と長者山との間に新しい時期の遺構(礎石建物など)が宮野礎石群を除いて見当たらないのは、上層の遺構が開田で削平されていると考えれば、疑問も解消される。前代の古墳時代集落は長者原中央から西側に立地しており、長者原地区の全体の地形から建物適地を考えると、礎石建ての倉庫をわざわざ谷部に集中させたとは考えにくい。かつては長者原と長者山との間にも礎石建物が建てられており、低地にも建物がある理由は高所に余地がなくなったためと考えておきたい。

このように考えると、第Ⅰ期から第Ⅱ期の段階で、整地Ⅱがなされて、長者原東側に建物群の範囲が広がり、その後8世紀代(第Ⅲ期)に入ってから建物の建設は停滞して、8世紀末(第Ⅳ期)になって再び建設が始まり整地Ⅰがなされ、その段階から小型礎石→大型礎石の建替えが行われているとみられる。瓦については7世紀末の第Ⅱ期(繕治期)に葺かれたが、第Ⅱ期の終わりと共に埋没して、第Ⅳ期(復興期)以降の礎石建物は瓦葺きではなかったと考えられそう。

貯水池でも瓦は上流側のトレンチのみ出土しており、下流では出土していない。瓦は長者原地区の全地点

で出土しているが、多くの場合、遺構に伴わない出土であり、小破片が多い。開墾後に残存したものと考えれば、瓦葺きの建物は長者原地区の各所に建てられていたと考えられる。深迫門、池ノ尾門でも少量の瓦が出土している。これらは人手で運ばれてきた可能性も残るが、長者原地区からの自然流入とは考えにくいので、両城門でも瓦を使用していたと想定もできよう。

### ③ 兵舎

現在、長者原90-IX区の側柱建物（16号）を兵舎として復元しているが、構造的には長者山X区の側柱建物（60～63号）と何ら変わるところはなく、16号やその北に接する17・18号を兵舎とする根拠は少ない。兵舎に関しては、東北城柵の志波城で竪穴住居が外縁築地塀に沿って1000棟以上も密集するケースが報告されている<sup>(24)</sup>。古代山城ではこのような竪穴住居の検出事例はこれまで報告されたことがなく、住居的な建物がないということは内部に滞在・居住する人が少なかったということを示している。大野城の場合、城内の管理施設は現在の四王寺集落（前田地区）周辺にあったと考えられている。大野城の建物は倉庫が中心と思われるが、かつて四王寺集落の裏山からは文様埴や墨書土器も出土しており、瓦の出土量も多いとされる<sup>(25)</sup>。水田畦では竪穴住居の断面が露出していたとの報告もあり、表採資料だが、鉄滓・鞆の羽口などから城内中央付近に鍛冶工房があったことも推定される。残念なことに、四王寺集落周辺は地形がかなり改変（削平）されてしまっているため、遺構の残存状況は悪く検出は困難と考えられている。基肄城では、大礎石群から7世紀後半代の百済系単弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦が発見されており、ここが城内の中心となる管理棟があった場所と目される。

### ④ 八角形建物

#### A. 多角形建物の遺構や古建築

鞠智城では八角形建物が2ヶ所で見つかっており（建替えも含めると計4棟）、現在、鞠智城のシンボル「鼓楼」として、八角三重塔が復元されている。

7世紀～12世紀頃の事例を挙げると、次のような遺跡で多角形建物跡が検出されている。鞠智城よりも古い事例は前期難波宮のみで、檜原廃寺は7世紀後半なのでほぼ同時代、山村廃寺（白鳳）や寺尾台廃堂（平安初期）などは遺構の残りが悪いいため、平面プランなどの詳細は明かではない。

前期難波宮・東西八角殿

檜原廃寺・八角塔(京都)

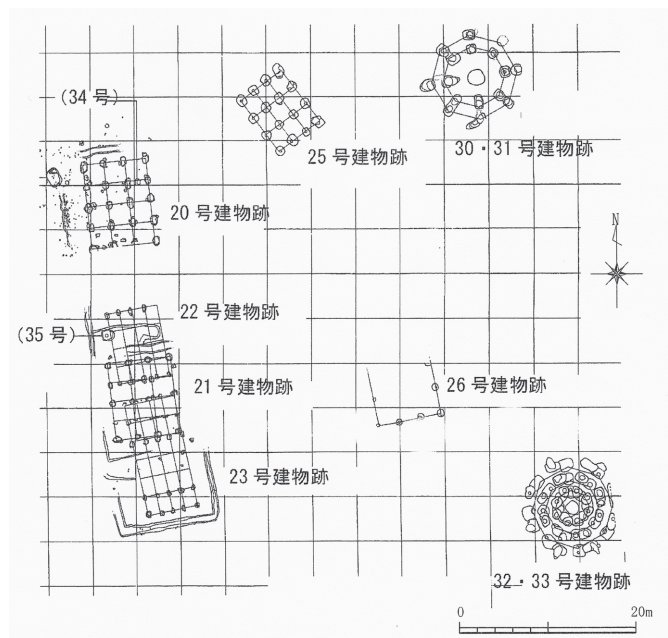
山村廃寺(トドコロ廃寺)・八角塔（奈良市）

菅寺尾台廃堂・八角堂（神奈川県川崎市）

栢社遺跡・八角円堂（京都市/源師行1155年）

三軒屋遺跡（佐位郡衙）・八面甲倉（群馬県伊勢崎市）

那須官衙遺跡（那須郡衙）・六角形建物（栃木県那珂川町）



第6図 鞠智城 20～23号、  
30～32号（八角形）建物跡



市道遺跡（渥美郡衙）・六角形建物（愛知県豊橋市）

加守廃寺・長六角堂（奈良県葛城市）

建物が残る事例としては、以下のようなものが挙げられる。鞠智城よりも少し後の奈良時代の建築であるが、法隆寺・夢殿や榮山寺・八角堂は古代の八角形建物を考える上で重要な遺構といえる。寺院関係に多い傾向はあるが、その性格は仏堂というよりも故人のための廟堂として建設されている点も注意しておきたい。

法隆寺・夢殿、西円堂（奈良県斑鳩町）

榮山寺・八角堂（奈良県五條市）

興福寺・北円堂、南円堂（奈良市）

安楽寺・八角三重塔（長野県上田市/現存する唯一の八角塔、鎌倉末1290年代）

壺阪寺（奈良県高取町）

正法寺・八角院（京都府八幡市/石清水八幡宮より移転）

六角堂（京都市）

鞠智城では、韓国の二聖山城の八角形建物がよく紹介されるが、韓国では古代山城を中心に多角形建物の調査事例が増加している<sup>(26)</sup>。

河南・二聖山城：八角形建物、九角形建物2棟、12角形建物

公州・公山城：12角形建物2棟

利川・雪峰山城：八角基壇（石製）

順天・劍丹山城：八角形建物

慶州・蘿井：八角形建物

集安・丸都山城：八角形建物2棟

平壤・清岩里廃寺：八角塔

開城・興王寺：八角塔

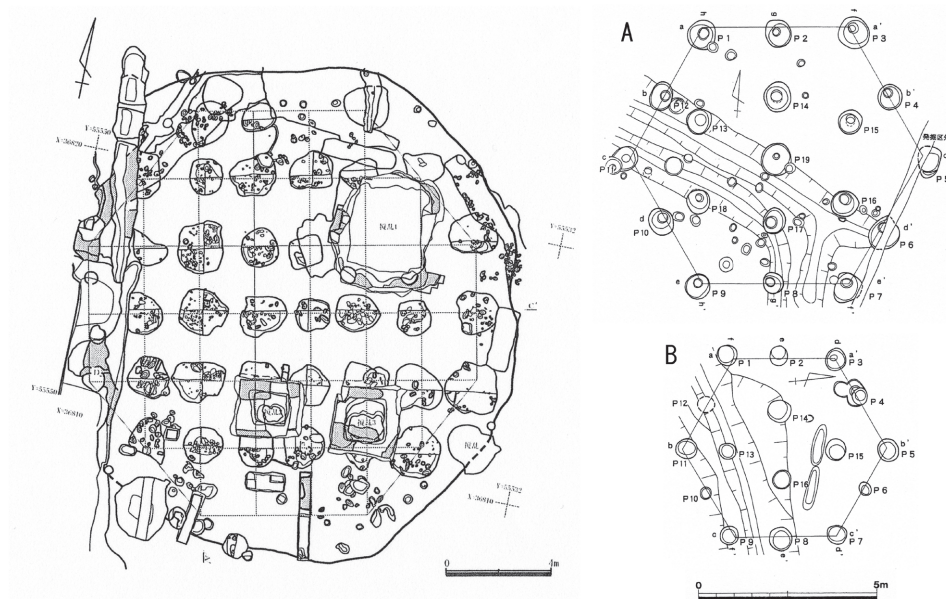
当初は百済との関係が注目されたが、その後の調査の進展により、時期的にも分布的にも統一新羅期の遺構が増加して、新羅と関係する遺構であることが判明しつつある。朝鮮半島の八角形建物で最も古い事例は高句麗の丸都山城や清岩里廃寺にみることができるので、八角形建物の淵源は高句麗にあると考えられ、それが三国統一後の新羅にも影響を与えたのだろう。高麗時代にも開城の寺院では八角塔が造られており、高句麗の伝統を窺わせる。また二聖山城や公山城では9角形、12角形の建物があり、12角形建物は多宝塔のような円堂ではないかとの指摘もある<sup>(27)</sup>。

## B. 八角形建物の上屋構造と性格

市道遺跡や那須官衙遺跡は郡衙と考えられている。寺院や宮殿の事例とは異なり、両遺跡の六角形建物は郡衙内の他の通常の建物（総柱の倉庫や側柱建物など）と混じって建てられており、この点は鞠智城の八角形建物のあり方とよく似ている。市道遺跡では倉庫群に併設されていることから六角形建物の性格も倉庫であるとし、那須官衙では正倉区画とは別処の「館」区画にあることから、六角形建物を特殊な建物＝宗教的な建物（仏殿？）と捉えている。遺跡によってほぼ同じプランの建物に対する性格付けが全く異なっているといえる。三軒屋遺跡における八角形建物が「上野国交代実録帳」にみえる“八面甲倉”に比定されることも注意しておきたい<sup>(28)</sup>。

鞠智城の八角形建物（南側/32・33号）では、中央に心柱があることを根拠に「塔」型の建築だったと推定されているが、そもそも心柱の有無と塔型かどうかは直接的には関係がない。高句麗の清岩里廃寺の八

角塔には心礎がなく、安楽寺の八角三重塔のように二階部分で心柱を受ける構造が想定されている<sup>(29)</sup>。鞠智城の八角形建物（北側/30・31号）は中央の柱穴が浅いため、塔ではなく夢殿のような「堂」型の建築と推定されているが、塔型に復元できないわけではない。三軒屋遺跡の八角甲倉の場合は総柱建物のように柱が林立していて、内部に空間を持つ堂型の建築には復元しづらい。李陽浩は八角形建物の建物プランについて、A（法隆寺夢殿）型とB（榮山寺八角堂）型の二種を想定している<sup>(30)</sup>。柱配置はA型が一般的だが、B型も檜原廃寺や蘿井などに事例がある。鞠智城は南北いずれもA型だが、南側（32・33号）は三重に柱が取り巻くため建物内に空間がほとんどない。中央の心柱に拘る向きもあろうが、市道遺跡や那須官衙遺跡の六角形建物にも中心柱があることは上屋構造の検討材料になるだろう。三軒屋遺跡の建物プランが通常の多角形建物と異なることから、例外視されているが、果たして鞠智城の八角形建物も、塔型で宗教的な施設なのかどうか、再検討の余地は大きく、現在の復元建物も一案に過ぎない。



第7図 郡衙の多角形建物（左：三軒家遺跡、右：市道遺跡（A型、B型））

鞠智城の八角形建物は対角線で平面規模を表しているが、通常の八角形建物の平面寸法の表示方法は、対角線ではなく対辺線ともいべき外接する四角形の一辺の長さ（対辺長）を用いるのが一般的である。これは作図法からみても頷ける。八角形の作図方法としては、対辺長からと対角線から描く二通りが考えられる<sup>(31)</sup>。

- (1) 四角形を描いて、四角形の四隅から対角線の半分で円を描いて、円と四角形の辺との交点を結ぶと四角形に内接する八角形が描ける。
- (2) 対角線を直径とする円を描いて、中心点から八方向（垂直・水平・45度斜め）に伸びる線を引いて、円との交点を結べば円に内接する八角形を描ける。

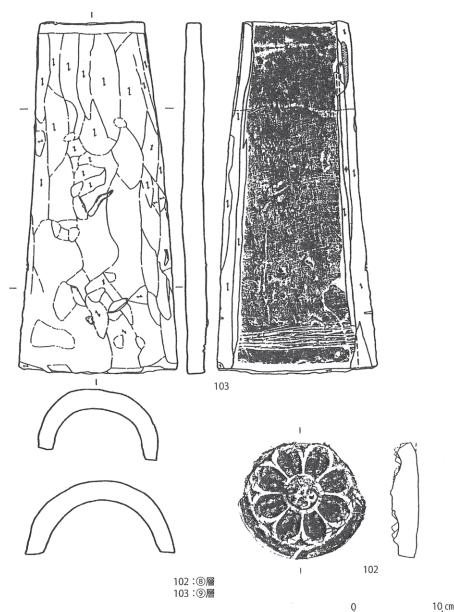
建築の場合、(1)の方法が最も容易に八角形を作図することが可能である。法隆寺・夢殿や前期難波宮・東西八角殿は回廊内に設けられており、八角形の一辺は周囲の回廊と並行している。鞠智城の場合、長者原地区東側の建物群全体の主軸方向が南北軸であるため、二棟の八角形建物も南北を主軸方向として並んで建てられていると思われるが、南北軸では対角線が主軸方向となる。他の八角形建物のように対辺線を主軸とみると、八角形建物のすぐ西に接する25号建物や26号建物との関連性が出てくる。長者原地区東側の創建期や繕治期の建物群（40号・65号下層）の主軸方向が南北でなかった可能性も考えねばならないだろう。

二聖山城の報告書では、八角形建物の性格について祭祀・宗教的施設（社稷壇）とされているが、八角形

建物付近からは円面硯が20点余り出土しており、最近、李京燮によって八角形建物が硯や筆のような文書管理器物の保管倉庫だった可能性が指摘されている<sup>(32)</sup>。二聖山城が6～7世紀頃の新羅の漢江流域を統治する拠点城であることから、二聖山城は他の治所への硯などの流通と分配も管理していたという。八角形建物付近からは鍛冶関係の遺物も出土しており、硯、鍛冶など祭祀とは縁遠い遺物が多い。二聖山城の最初の調査(一次)で、土馬や鉄馬といった祭祀遺物が大量に出土したことも、二聖山城の多角形建物を祭祀・儀礼用といったイメージで捉えさせる遠因ではなかったかと想像される。市道遺跡でも六角形建物は倉庫であるとされ、三軒屋遺跡で八角形の倉庫の実在が文献・遺構の両方から裏付けられたことを考えれば、鞠智城の八角形建物も二聖山城のような特殊な物品を保管する倉庫だった可能性も大きいと思われる。

## ii. 瓦

建物跡と密接に関係する遺物が瓦である。鞠智城の瓦は肥後地域で最古の部類に入るとされ、鞠智城が築かれたであろう7世紀中葉(665～667年頃)の年代が与えられている。特に鞠智城の軒丸瓦は「百済系単弁軒丸瓦」であることから、亡命百済人関与の証拠とされてきた。軒丸瓦の文様系譜としては、大野城の創建期の「大野城033型式」との類似がつとに指摘され、大野城や基肄城と共に大宰府の影響下で製作されたとみられている。軒平瓦がないこと、軒丸瓦の瓦当部の接続技法に「丸瓦被せ式技法」<sup>(33)</sup>という特異な技法を用いていることや桶巻き作りばかりで一枚作りがないこと、縄目叩きがみられないことなどから、全て奈良時代以前～7世紀代の瓦と考えられている。



第8図 鞠智城 瓦當と丸瓦

### ① 供給窯の所在

鞠智城の場合、大野城や基肄城と比べて、8世紀以降の瓦が出土しない点が大きな相違点だろう。肥後の古代寺院では、鞠智城の瓦の次段階の瓦(8世紀初頭以降)から普及期に入っており、何故鞠智城には8世紀以降の瓦がないのか、肥後地域の初期寺院である陳内廃寺や立願寺廃寺出土の瓦と比較しても不可解な点である。また鞠智城への瓦供給窯の所在も解明されていない。実は大野城及び大宰府・観世音寺への7世紀代の瓦供給窯も確認されていない。基肄城の場合、南水門南方の丸林にこうらぎ瓦窯跡があり、基肄城への供給窯とされる<sup>(34)</sup>。しかし基肄城創建期の百済系単弁軒丸瓦はこうらぎ窯では確認されておらず、供給窯が別処にある可能性が高い。7世紀代には埴上り窯(宇治市)をはじめとして数10kmも遠隔地の瓦窯から瓦が搬入されている事例が多く、基肄城の創建瓦も大野城などと同様かもしれない。8世紀代以降の事例になるが、最近の調査によって、大宰府・観世音寺―老司窯、水城―水城窯(ロストル窯)、大宰府・筑前国分寺―国分寺窯、鴻臚館―女原窯など、大宰府関連遺跡でも消費地―生産地が判明した遺跡が増加しつつある。

### ② 瓦の編年と系譜

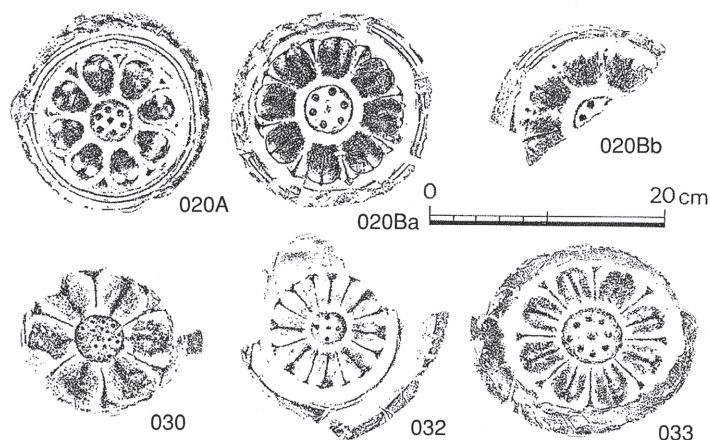
瓦の編年的には、平瓦凹面は桶巻き作りの模骨痕、凸面は格子目叩きの瓦ばかりで、奈良時代に一般化する縄目叩きはない。長者山地区出土の平瓦に一枚作りかと推定される縄目叩きの製品があるものの、全体と



しては少数派で8世紀でも末頃と推定されている。しかし鞠智城の瓦が肥後では最古であるといっても、筑前や豊前地域で確認されている初期瓦に時折施されている竹（簾）状模骨痕などはみられない。瓦当文様の系譜的には、鞠智城軒丸瓦は百済系単弁軒丸瓦—九州単弁であるとされてきたが、最近の研究動向として

は、蓮弁の形状や蓮弁中央に有稜（有軸）があること、弁間に楔形が中房まで入ることなどから、古新羅系統の瓦の特徴を持つことが指摘されており、単純に百済系単弁と一括りには出来なくなっている<sup>(35)</sup>。

栗原和彦は大宰府の軒丸瓦第一段階（老司式・鴻臚館式以前）について、020A、020Ba、020Bb型式などと、030、032、033型式を別系統と位置づけて、前者を天



第9図 大宰府出土軒丸瓦

智期の軒瓦とし、後者を統一新羅時代になってから導入されたもので天武・持統期の瓦とする<sup>(36)</sup>。020Ba（観世音寺）などに代表される、いわゆる九州単弁の軒丸瓦は、豊前地域の古代寺院と基肄城及び大願寺廃寺などの肥前の古代寺院に広く分布しているが、系譜的には畿内の坂田寺などとの関連があるとされる<sup>(52)</sup>。このタイプの軒丸瓦は、近年、福岡市的那珂遺跡や井尻B遺跡で確認され始めており<sup>(37)</sup>、那珂遺跡出土の初期軒丸瓦が牛頸の月の浦窯跡（大野城市）から供給されていることを勘案すると、初期瓦につづく九州単弁も牛頸窯からの供給が想定されよう。筑前地域における本格的な瓦専業窯は牛頸窯跡群の中では北端に位置するウトグチ窯跡（春日市）だが、その前段階までは須恵器との瓦陶兼用窯で焼かれているので、定期的に鞠智城の瓦も瓦陶兼業窯で生産された可能性は高い。

### ③ 工人集団の手掛かり

鞠智城の瓦はその形状や寸法、叩きなどから、丸瓦がAとB、平瓦はA、B、Cの三種に分類されており、軒丸瓦当とセットになる丸瓦も明らかになっている。梶原義実は「工人単位」として、叩き板よりも桶型を重視し、1工人集団は一つの桶型を使用していたとする。叩き板は消耗も激しいため、一人の工人でも複数の叩き板を使用することが考えられるという<sup>(38)</sup>。鞠智城の場合も瓦の形状から2～3つの工人集団を想定することができるので、城に隣接して専用の瓦窯が設けられた可能性は低いのではないだろうか。城内から出土する須恵器の供給地として、八女窯跡群や宇城窯跡群のものがあるとされるので、瓦も筑後や肥後から搬入された可能性もあるが、遠く牛頸窯から供給された可能性も残る。鞠智城出土の平瓦の叩きの中に、太い横方向の平行線のある—いわゆる「凸面条痕文」という珍しい凸面処理が施されたものがある。熊本県内では、陳内廃寺の重弧文軒平瓦に類似例があるだけで西海道地域にはなく、法隆寺西院伽藍と稲舟



第10図 平瓦の凸面条痕文（1 鞠智城、2 法隆寺、3 稲舟窯）

窯跡（石川県輪島市）で類例が確認されている<sup>(39)</sup>。陳内廃寺とは軒丸瓦の文様や瓦当接続技法の面でも共通点があるが、この凸面条痕文も肥後への瓦の導入に関して、その工人の出身地を知る重要な手掛かりの一つと考えられる。稲舟窯跡は共伴する須恵器から7世紀末～8世紀初めの年代であり、先の瓦当文様の系譜的な検討と共に、鞠智城瓦の年代が第Ⅱ期（繕治期）であることを示唆している。

#### ④ 瓦の再利用の問題

瓦に関する問題はもう一つあり、鞠智城では7世紀後半の創建期の瓦を9世紀代まで200年間もずっと使っていたのかどうかである。8世紀末～9世紀にかけての第Ⅳ期（復興期）にも瓦は新たに供給されているが、出土地点も長者山に限られ非常に少ない。大野城では地区によって若干の相違はあるものの、8世紀代～9世紀代にかけての瓦も出土しており<sup>(40)</sup>、建物も3×5間→3×4間とそのプランと占地を変化させながらも増築を継続し、修理・維持されていたと考えられている。基肄城でも表採されるのは縄目叩きの瓦が多く、少なくとも8世紀代までは建物群が維持メンテナンスされていたらしい。鞠智城の軒丸の瓦当部分は早くに脱落してしまい、完形のものは貯水池で発見されている。貯水池は8世紀後半以降は使用されなくなったとされるから、これらの軒丸瓦は8世紀代に貯水池に流入したのだろう。8世紀代には肥後国の瓦の供給体制は整ってくるので、瓦の供給に問題がないにもかかわらず、鞠智城には瓦が搬入されていないことになる。状況を総合的に考えると、7世紀後半代は瓦葺きだったが、8世紀後半以降はほとんどの建物が瓦葺きではなかったと思われ、土器の変化（須恵器→土師器）と同様、ここにも施設の性格の変化が窺われる。

#### ⑤ 瓦葺きと礎石建物の関係

鬼ノ城と高安城の建物は、礎石建物であるが瓦は伴わない<sup>(41)</sup>。郡衙遺跡でも瓦葺きでない礎石建物は多く、礎石建て＝瓦葺きという公式的な捉え方は問題がある。穀倉ならば、倉庫はあたかも巨大な米櫃となるため、貯穀の重量を支えるだけでも礎石の方が望ましい。8世紀以降、全国的に瓦の供給体制が整ってきても、郡衙における瓦葺きは少なく、この点について、小笠原好彦は郡司の任用と郡衙の移転に起因するとされる<sup>(42)</sup>。少なくとも8世紀初頭以降、鞠智城では新規の建築はなく、停滞期というよりも一旦廃城となっている可能性が高い。貯水池の維持停止もそれを裏付けよう。最前線の金田城が廃城になり、対大陸防衛の北部九州～瀬戸内～畿内という縦深シフトからも外れ、九州島内でも防御正面から最も遠い鞠智城が8世紀初頭以降も大野城などと同じように維持されたというのは、これまで大きな疑問であったが、「8世紀代一時廃城」説が認められるのならば、疑問は解消される。

#### iii. 貯水池跡

鞠智城の城内施設の中でも最も問題なのはこの巨大な貯水池だろう。日本の他の古代山城ではこのような大型の貯水池は現在まで確認されていない。大野城、基肄城には、天水溜めもしくは井戸状の遺構が尾根上にあるが、谷部を堰き止める形の貯水池は今のところ見つかっていない。鬼ノ城では従来5ヶ所の城内貯水池跡とみられる湿地が指摘されていたが、最近の城内調査最終年度で2ヶ所の土手状遺構が調査された。同様な堤防状の石積み遺構は御所ヶ谷城で3ヶ所確認されている。また四国香川県の讃岐城山城と屋嶋城では現在も城内に貯水池が残る。屋嶋城の血の池（瑠璃宝池）は調査の結果、屋嶋寺の瓦が出土したことから少なくとも屋嶋寺創建期の10世紀代までは遡るとされている。

鞠智城の貯水池は、同じ谷堰き止めタイプの鬼ノ城や御所ヶ谷城の貯水量が200～300m<sup>3</sup>であるのに対して規模が非常に大きい。下流の堤体部と谷頭で高低差があるため、中間にいくつかの堤を設けた多段式の貯

水池だったとされるが、総貯水量は5000m<sup>3</sup>を越えるという。赤司善彦の指摘のように農業灌漑用の規模といえる<sup>(43)</sup>。工法的には堤体部に敷粗朶工法を使用しており、この点も薩摩遺跡や狭山池、水城などと同様な技術が認められる。木樋などは検出されていない。

韓国の山城では、谷部分に方形や円形の石積み護岸の貯水池を設ける場合が多く、最近では地下式木櫛庫と呼ばれる木製遺構の確認例が増加している。これは貯蔵用の倉庫的な施設ではなく、木櫛の周囲を粘土で目張りしていることから、貯水用と理解されている。ちょうど大野城、基肄城の天水溜めと規模も近い。同様な木櫛庫は谷部の貯水池底部からも検出されている。城内の居住者の飲水用だけならばこのような貯水施設を複数箇所設ければ十分であり、上部に屋根が付いていた可能性もある。

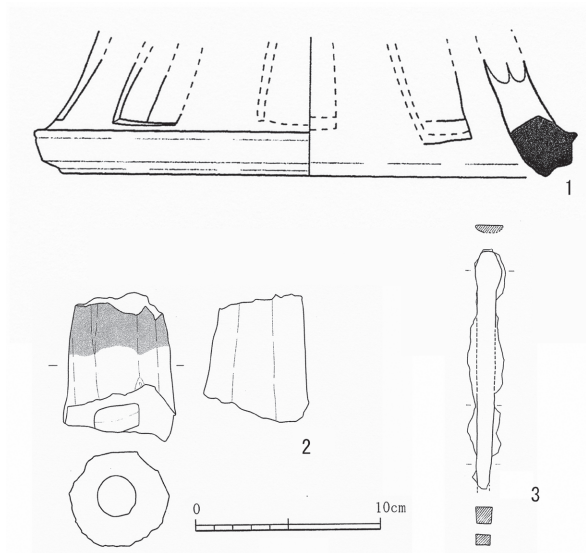
#### iv. 鍛冶関連遺物

近年、鬼ノ城で鍛冶工房跡が発見されて以来、古代山城と鍛冶（鉄器加工）が注目されている。鍛冶遺構は四国愛媛県の永納山城でも見つかった。城で鍛冶工房というと「武器生産」と短絡しがちだが、鍛冶施設の目的は、おそらく「城壁石材切り出し・加工」や「建築工具の修理用」だろう。特に石材採取や加工では鉄器の損耗が激しく、近世の石切り丁場では鍛冶炉は必須の施設だった。

あまり知られていないが、金田城では城内中央のビングシ山南東斜面で鍛冶工房とみられる遺構が確認され、鉄滓や鞆羽口はもちろん、焼土堆積や鬼ノ城の鍛冶工房とよく似た小屋がけ用の柱穴列まで見つっている。大野城でも先述のように鉄滓・鞆羽口が採集されており、鞆智城でも貯水池から羽口1点が発見されている。鞆智城でも今後、鍛冶工房の発見が期待される。おそらく北側の谷方面に設けられたのではないかとと思われる。神籠石系山城では鹿毛馬城の東南麓近辺で鉄滓が発見されている。

#### v. 陶硯

鞆智城では、鞆羽口と同様にあまり注意されていないが、円面硯の脚部の小破片1個が貯水池から出土している。形式的には檜崎分類のI-C型<sup>(44)</sup>である。時期は7世紀後半～8世紀前半頃のもので鞆智城の第Ⅱ期（繕治期）の遺物とみられる。転用硯も1点出土している。日本の古代山城の中では、鬼ノ城で硯の出土が最も多い。これまでの調査で円面硯4点、転用硯が9点出土している。大野城では八並礎石群で風字硯の発見があり、時期は9世紀以降となる。播磨城山城でも転用硯が表採されている。鞆智城の側柱建物（60～63号）は官衙の正庁的なコの字形の配置が注目されているが、円面硯や木簡と共に実務的な評価もするべきだろう。



第11図 鞆智城 出土遺物  
(1 円面硯、2 鞆羽口、3 鉄鏝)

#### vi. 木簡

日本の古代山城の中では、鞆智城が唯一の発見例である。これも貯水池から出土したもので、いわゆる荷札木簡である。木簡の形式的には大宰府と関連するタイプとされている。「秦人忍□五斗」とあるので菊池郡における秦氏の存在を窺わせ、鞆智城への米・五斗一俵を搬入を示す史料とされる。韓国山城での木簡出土事例として、鞆智城では二聖山城がよく紹介されるが、咸安城山城の木簡出土数は116点を超えている



<sup>(45)</sup>。その多くが荷札木簡だが、新羅の地方拠点城の維持経営に必要な人と物資の供給実態が具体的にわかる史料となっている。日本の古代山城の場合、時期的にまだ墨書土器の出土もなく、韓国のような銘文瓦もないので、貯水池・低湿地の調査による木簡発見が文字史料の少ない古代山城の実態解明の糸口になると期待される。

## vii. 銅製小仏像

これも日本の古代山城の中では、唯一鞠智城で発見されたもので、貯水池祭祀と関連深いとする意見もあり、他にも祭祀用の呪具類（陽物）が出土している。仏像の出土から連想して、八角形建物も仏塔的なものと想像する考えもあるが、先述のように八角形建物は塔型の建物かどうか自体決定打はなく、問題は残る。

大野城に四王院が設けられるのは奈良時代の末頃の774年、基肄城では「山寺」と書かれた墨書土器（8世紀末頃）が出土しているが<sup>(46)</sup>、両城に築城当初から宗教的な施設があったかどうかははっきりしない。鬼ノ城では瓦塔片が出土しているが、城内の礎石建物のあった場所を再利用する形で平安期に山岳寺院が造られている。他の古代山城の場合も廃城後、平安期に宗教施設が設けられている事例は多いが、平安期は国家仏教の時代であり、山城の跡地が国家の管理下にあったことが窺える。鞠智城の場合は宗教施設としての再利用はされていない。

## viii. その他

鞠智城の場合、時期によって建物が建替えられ、貯水池などが維持されなくなるなど、城内の構造変化に対しては注意が向けられているが、城門及び城壁については築城当初の状況が維持されていたと考えられがちである。しかし城門遺構の状況などからは8世紀末以降の第IV期（復興期）に城壁や城門について何らの変化も認められない。施設としての入口はあったと思うが、創建期の一それも掘立柱の城門が100年以上もずっとそのまま維持されていたとは考えにくい。このことは大野城などでも同様で8世紀後半～9世紀の時期に創建期の広大な城域が維持されていたわけではないだろう。それは衛率40人という城を守る兵士数からも窺える。兵舎の項で述べたが、竪穴建物などが未検出である点は、大野城や鞠智城が多数の兵士の駐屯地としては使われていなかったことを示す。なおこれも鞠智城が唯一の出土例であるが、鉄鏃が1点出土している。これまでのところ、他の日本の古代山城では石弾も含めて武器は出土していない<sup>(47)</sup>。

## （5）周辺遺跡の動向

### i. 横穴墓

筆者は1991年の拙稿で、古代山城周辺に有力な古墳がなく、むしろ過疎地に立地していることを指摘したが<sup>(48)</sup>、鞠智城の所在する菊池郡も例外ではなく、古墳時代の全期間を通して前方後円墳が築かれていない。それとは対照的にこの地域では横穴墓が非常に多く造られている点は注目すべきだろう<sup>(49)</sup>。鞠智城南方のうてな台地西側斜面にある瀬戸口横穴群は総数253基以上とされ、菊池川流域はもちろん肥後でも最大規模といわれる。瀬戸口横穴群ほどの規模ではないが、米原台地南側斜面の尾根筋一深迫門に近接して堀切横穴群がある。大井樋、大井樋谷、樋口横穴など3つの支群に分かれているが、約80基が確認されており、こちらも菊池川流域の横穴群としては規模が大きい。瀬戸口横穴群は1960年代（3基）と1979年（3基）、1987年（4基）、そして2001年（13基）にも調査されており、出土遺物などから6世紀中葉～7世紀前半にかけて造墓・追葬が行われていたことがわかっている。鞠智城西方の木野川流域や内田川西岸にも横穴墓は多い。

横穴墓の被葬者像については、外来系の渡来人や特殊な職能集団を想定する説もあるが<sup>(50)</sup>、瀬戸口横穴群はコの字形屍床を持つ肥後型の横穴で他の菊池川流域の横穴墓と変わるところはない。肥後の横穴墓については阿蘇溶結凝灰岩の分布に規制を受けており、横穴式石室を持つ群集墳と共に古墳時代後期の群集形態を持つ墓群として捉えねばならない。それでも前代まで造墓活動があまり盛んでなかった地域で急激に横穴墓の造営が始まることは特徴的であり、外来的な被葬者像、そして政治的な造営契機が想定できよう。瀬戸口横穴群や堀切横穴群にはそれと対応するように台古墳や袈裟尾高塚古墳といった比較的大きな円墳が築かれている。他の地域の横穴墓の研究から、横穴群と円墳の関係を横穴墓を造営した集団とそれを統率する首長と捉えることもできる。横穴墓の造営と鞠智城以前に長者原地区にあった古墳時代集落は時期的に一致する。この集落の住民が横穴墓被葬者であったことは集落の出現状況からみてほぼ間違いないだろう。

## ii. 条里

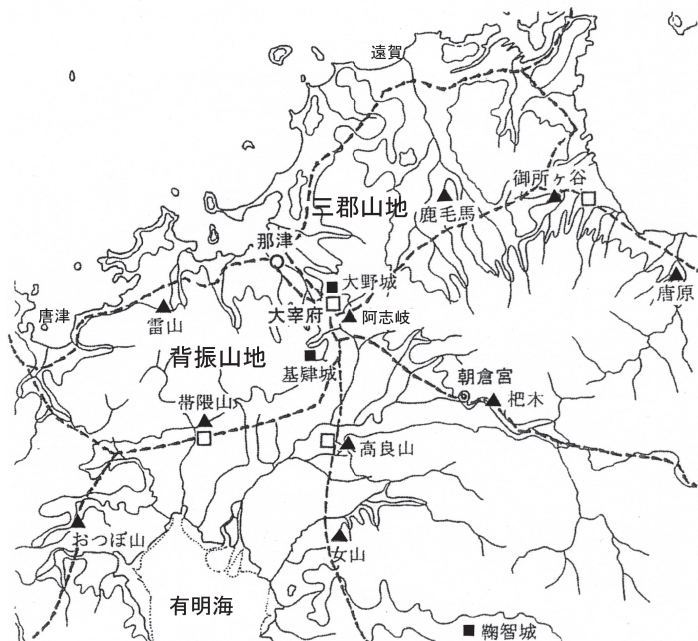
菊池川中流域の条里は山鹿郡から合志郡まで東北方に傾いた条里が広がっているが、鞠智城西方の菊鹿条里区だけはほぼ正方位の条里が展開しており、菊池川中流域の条里の中では一種の異方位条里区となっている。菊鹿条里区が正方位をとるのは単に地形的な制約かもしれないが、鞠智城への道路と推定される条里区南端ラインの延長線が、鞠智城西側外郭線上の涼みヶ御所（標高150m）に当たる<sup>(51)</sup>ことは興味深い。条里や駅路が小丘陵のピークなどを目標に測設されているケースは多いが、涼みヶ御所のピークは南側の灰塚よりも低く特別に目立った存在ではない。このピークはその地名から烽の所在地と推定されており、条里区の測量のために眺望の効く烽施設のある山頂部が利用された可能性は大きい。そうすると鞠智城の造営→菊鹿条里区の測設となり、鞠智城と菊鹿条里区の密接な関係が窺われる。菊鹿条里区が条里施行の前代に政治的に特殊な地域（ミヤケなど）であった可能性は、先の横穴墓の存在などと合わせて今後検討していかなければならない課題である。鞠智城城内の貯水池が農業灌漑用の規模を持つことは菊鹿条里区との関連で説明できるかもしれない。

## 4. 造営の画期

『報告書』では、鞠智城の変遷を、第Ⅰ期→第Ⅱ期→第Ⅲ期→第Ⅳ期→第Ⅴ期と5段階で解説している。ここでは前章で検討を加えた問題点を踏まえて、鞠智城の変遷過程の画期をどのように解釈すればいいのか、また各々の時期の築城目的が奈辺にあったのか、他の山城などと比較しながら検討を加えてみたい。

### (1) 創建期（7世紀後半）

鞠智城の築城年代を天智6年（667）とする見解が出されているが明確な根拠はない。土器に古相のものもあるが、瓦には7世紀中葉を遡るような初期瓦的な様相は僅かしかない。古代山城の築城が白村江敗戦後一斉に進められたかのよう



第12図 北部九州の古代山城分布図

な論調が多いが、これも問題があるだろう。そもそも大野城と基肄城を「南北から大宰府を守る城」という固定したイメージで見過ぎていないだろうか。水城と大野・基肄の築城が百済の扶余をマスタープランにしているという「大宰府羅城」説は半ば定説化しているが、白村江敗戦直後の段階では守るべき大宰府部分で遺構がほとんど確認されていない<sup>(53)</sup>。

水城は「遮断城」といわれるタイプの城で、敵の侵攻を止める関門だが、水城と小水城だけでは全ての道を遮断することはできない。博多湾の防衛を考えた場合、巨視的にみて、東の三郡山地、西の背振山地—これらが自然の遮断線となる。その中央の地峡部を水城で塞ぎ、北側の三郡山地の南の端に大野城、西側の背振山地の東端に基肄城を配置し、三郡山地側のショウケ越えから宗像方面までを東の防衛ライン、背振山地を越える何本もの峠道を塞ぐのを西の防衛ラインとして考えてはどうだろうか。敵が唐津方面や遠賀川河口に上陸する可能性もあるが、上陸地点として最も可能性の高い博多湾正面の後背山地を東西に展開して陣地構築することができる。長門と有明海方面への上陸可能性は残るものの、主攻地点ではない。

築城に至る経緯を詳細に辿ると、郭務棕と劉徳高の遣使に対応するかのように築城記事が載る。敗戦後の倭国は当初から積極的な防衛策を打ち出していたわけではなく弥縫策的な後追いの対応が続けていたように思える。664年の水城・防人・烽の設置、665年の大野・基肄の築城と667年の金田、屋嶋、高安の築城という段階的な防衛施策は、人・モノ・金の優先順位を考えれば肯ける。このような中で鞠智城の築城が早期に開始されたとは考えにくい。

遮断施設は、水城と小水城以外にも基肄城の東南麓にも設けられており（関屋・とうれぎ土塁）、久留米にもある（上津土塁）。これらは二次、三次的な防衛ラインとみることによってその存在が理解できる。鞠智城の場合、北からの侵攻は筑肥山地＝南関町が一つのポイントであり、ここを突破されると菊池川中流域は席卷される。また有明海方面へ侵入された場合も上陸地点は複数考えられるが、朝鮮半島の防衛思想は我が国とは異なって“水際作戦”ではないため、海岸からある程度内陸へ引いた地点に拠点（本城）を置くのを常套とするから鞠智城の立地をむやみに訝しがする必要はない。本城だけポツンとあるのでは防衛施設としては役に立たない。当然、監視哨や通信のための烽燧、有事には前進陣地も設けるだろう。鞠智城から半径11km（実路で16km）を描いてみると、合志郡と山鹿郡の中心地域が入る—これが半日で作戦行動が取れる範囲となる<sup>(54)</sup>。

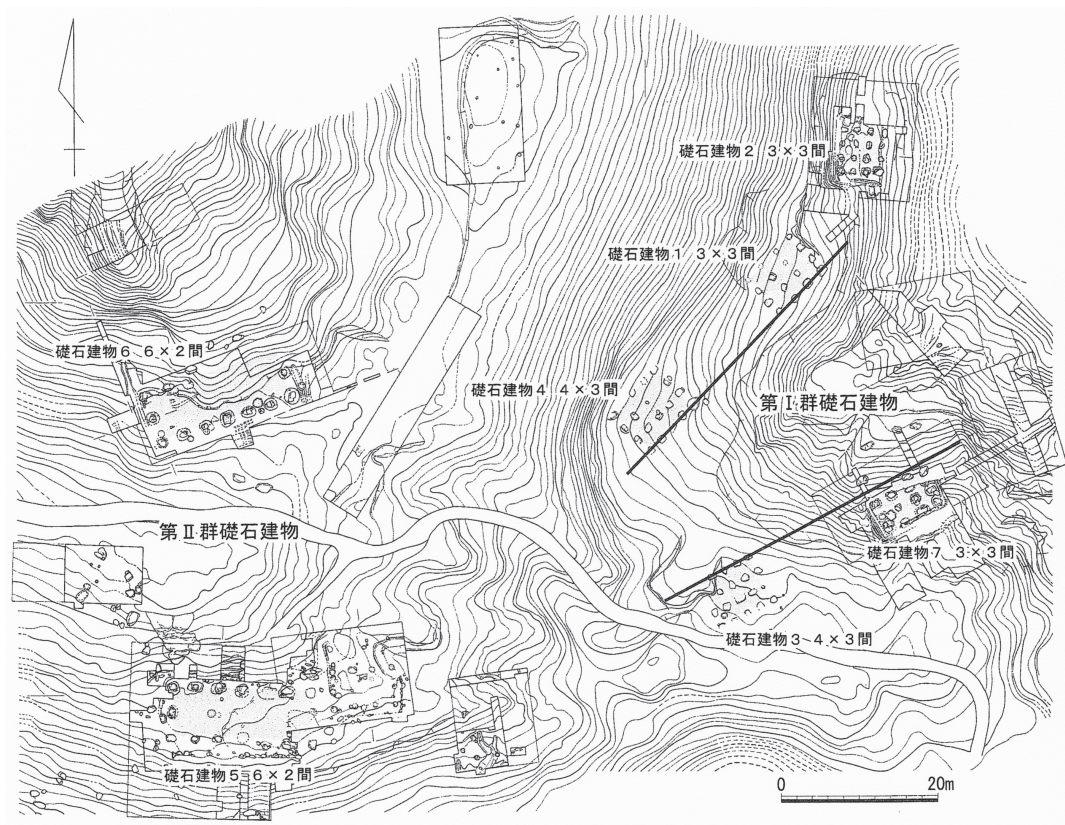
最初の構築物はまず城壁が最優先となる。築城期間について3年とか10年とかこれまで議論されているが、根拠はない。参考として韓国の場合、新羅の南山新城では築城に当たって平均担当距離として約19.2mごとにおよそ200の工区に分けられ<sup>(55)</sup>、いわゆる割普請方式が取られている。真興王12年（551）の「明活山城作城碑」によると、高さ十歩（約14m）、長さ十四歩三尺三寸（約21m）の城壁を35日（11/15～12/20）で完成させており、城壁などの工事に関しては何年もかかるものではなさそうである。「南山新城碑」はこれまでに10個発見されている。碑文によると真平王13年（591）2月26日に完成となっているが、『三国史記』では真平王13年7月に「築南山城」とある。これは農閑期である冬季に普請（土木工事）を行って、その後の城門や内部の建物など作事（建築）部分の完了が7月と考えれば無理なく理解できる<sup>(56)</sup>。

日本の場合、築城記事だけでは着工なのか完成なのかよくわからない。665年は8月、667年は11月で、是歳とだけで月の記載のない664年も水城の敷粗朶に使用された樹種の分析によって5月中・下旬～7月中旬頃の伐採らしいので、664年や665年は農閑期を待たずに工事を開始しているのかもしれない。白村江敗戦後の大陸からの侵攻から守るための築城なので、かなり無理をして動員している可能性は高く、そうであれば、なおさら完成まで何年もかかっているのは防衛網として役に立たないことは普通に考えれば自明のことである。



## (2) 繕治期（7世紀末～8世紀初頭）

古代山城の城内には、長期の籠城のために貯穀された多数の倉庫があるというイメージが固定化している。『報告書』によると、長者原地区西側の掘立柱建物群が最初に建てられた建物とされる。これらは側柱建物を中心としており、長期籠城に備えた倉庫群のイメージとはかけ離れている。大野城でも最初の建物は主城原地区のSB064で、掘立柱の側柱建物である。金田城ではピングシ山や東南角でこれまで6棟の建物跡が確認されているが、掘立柱の側柱建物ばかりで倉庫のような総柱建物は1棟もない。また1×4間、1×3間と非常に小規模である。基肄城はほとんど発掘調査されていないため、現状では礎石建物しかわかっていない。瓦からみると大礎石群や大久保地区に最も古い建物があったらしいが、現在の礎石建物の前身建物として掘立柱建物があった可能性は高い。中心部の建物が良好な状態で発掘された鬼ノ城は礎石建ての側柱建物2棟、倉庫と考えられる総柱建物6棟が軸線を揃えた計画的な配置をとっている。



第13図 鬼ノ城 建物群配置図

その後の状況として、金田城では城門が掘立柱→礎石建てに改築されているようだが、城内建物は掘立柱のまま廃城となっている。鬼ノ城では礎石建物の下層に掘立柱の遺構が見つかっていないため、当初から礎石建てで計画されたとみられる。硯類の出土が多いことや側柱建物の存在から、鈴木靖民は鬼ノ城の城内における官人の駐在を指摘している<sup>(57)</sup>。鞠智城でも僅かではあるが円面硯や転用硯、木簡が出土しており、鬼ノ城と同じように事務系官僚がいたことは間違いない。鬼ノ城の礎石建て側柱建物の規模は後の国庁の脇殿クラスに匹敵する。肥後国府の所在はまだ明らかではないが、時期的に鞠智城がブレ国府である可能性もある。この時期の古代山城は戦闘的というよりも官衙的な様相が強い。鞠智城瓦の年代もこの時期に当たる可能性が高く、地方ではまだ珍しい瓦葺きの建物が建ち並ぶ様子は政治的なデモンストレーションのようにも思える。寺

院や郡衙といった地方行政拠点が整備されていくのはこの時期以降で、鞠智城はその先駆けといえる。天武・持統朝に新羅との関係が密接になるが、八角形建物や軒丸瓦当の文様にもそれを窺うことができる。

### (3) 停止期（8世紀第2四半期～第3四半期）

8世紀初頭、ほとんどの古代山城が廃城となり姿を消す。大宰・総領制→国制に移行して存在基盤を失ったと考えられている。国単位では維持ができなくなった、対唐の防衛シフトから対新羅の防衛へ移行したなど、いろいろな説が唱えられているが、瀬戸内地域で古代山城がなくなることは事実である。九州だけは大宰府という形で大宝律令下も西海道を総監する機構が維持されたため、山城も維持されたい。しかし金田城は8世紀以降の遺物が出土しないため、廃城となったと考えられている。鞠智城は9世紀後半まで文献記録があるため、大野城などと共に8世紀代も継続されたと考えられてきたが、『報告書』によって8世紀第2四半期～3四半期の遺物がほとんど存在しないことが判明し、人間活動の痕跡がないという。城壁は残っているし、建物も高安城のように破却されなければ残るだろうが、人がいないというのではもはや「城」としての機能を維持しているとは言い難い。さらに鞠智城の場合、8世紀後半以降、貯水池の維持メンテナンスもされなくなるという事実からみても、金田城と同様、8世紀初め（720年頃）の時点で一旦停廃されたとみるべきではないだろうか。鞠智城第Ⅲ期の遺構・遺物としては、木簡や小型礎石の建物などが挙げられているが、積極的な根拠としては弱い。

### (4) 復興期（8世紀第4四半期～10世紀頃まで）

『報告書』によると8世紀第4四半期（8世紀末頃か？）から再び活動がみられるという。礎石建物が大型化することを新たな対外的な危機への対応とする考えは多い<sup>(58)</sup>。しかし貯水池機能は停止し、城壁も修築されておらず、城門は掘立柱用の門礎石のままという状態からすると、7世紀後半に鞠智城が築城された時の状態に復帰したとは思えない。礎石建ての倉庫群を中心とした新しい役割を担う施設として再利用されていると考えたい。新規の建物として長者山地区に礎石建物群が造られ、瓦も新たに縄目叩きの製品の供給を受けている。郡衙では瓦葺き建物は少ないので、鞠智城第Ⅳ期の礎石建ての倉庫が瓦葺きでないというのはそれほど不思議なことではない。この時期の鞠智城の管理・運営主体がどこなのか—これも議論があるが、肥前国に所在する基肄城もその管理は大宰府が担ったとみられるので<sup>(59)</sup>、鞠智城の場合もやはり大宰府が管理主体であろう。肥後と大宰府との密接な関係からもこれは首肯できる。赤司は大野城と基肄城の倉庫を比較して、規格性の高い3×5間の倉庫は両城にあるが、後出（おそらく9世紀以降）の3×4間倉庫は大野城のみで基肄城にはないことから、9世紀以降、基肄城の管理が肥前国に移管されたとみている<sup>(60)</sup>。しかし3×4間倉庫が建設されていないことから基肄城は9世紀以降存続しなかった可能性も高いと思われる。8世紀初めに停止された鞠智城の敷地は、地元の肥後国や菊池郡の管理下には置かれず、大宰府の管理下に置かれていたとみるべきなのだろう。『報告書』によると、鞠智城は10世紀第3四半期頃まで維持されていたらしい。大宰府は藤原純友の兵火（940年）後も再建されており、全国的に郡衙が姿を消す10世紀初頭以後も暫く維持されていたということになる。問題はこの時期の鞠智城の果たした役割である。

## 5. 文献史料との検証

さて『報告書』に基づいて、鞠智城の変遷を1 初築（創建期）→2 整備（繕治期）→3 廃止（停止期）→4 再利用（復興期）と4段階で捉え直してみた。各々の時期の文献史料とのクロスチェックを行って、鞠智城の実相に迫ってみたい。

## （１）鞠智城の築城年代と繕治期

### i. 築城記事採録の問題

築城年代に関しては先述したように文献記録がなくわからない。かといって根拠なく実年代を比定しても意味がない。文献記録にないことに対して、その意味を詮索されるのを側聞するが、これも文献史料の限界性を越えた解釈である。出宮は養老3年（719）の「備後国の茨城・常城の停止記事」について、各々の城が郡名を冠して区別されていることから、天智6年（667）築城の屋嶋城が「讃吉國山田郡屋嶋城」と郡名（当時は評名）を記載しているのは、讃岐国内のもう一城の存在を暗示していると指摘した<sup>（61）</sup>。讃岐でも一つの古代山城というと坂出市の讃岐城山城がある。卓見だと思われるが、このことから文献＝史書には百科事典的に全記録が網羅的に掲載されるわけでないことがわかる。鞠智城は文武2年（698）に繕治されているので、それ以前の築城であることは間違いないが、城壁の構造や出土遺物などからは、660年代後半（665～670年頃）に築城されたとしかいいえない。ちなみに茨城・常城の停止記事は、同年の軍団制縮小（志摩・若狭・淡路の軍団廃止や諸国の軍団・兵士数の削減）に関連する事柄として修史局に取り上げられたとみられている。

### ii. 大宰・総領制と古代山城

天智7年（668）に高句麗を滅ぼした唐が669年頃、倭国征討計画を進めていたことはあまり注意されていない。その後、羅唐戦争が勃発したが、当初唐と新羅は互いに日本へ使者を送り、自陣営への取り込みを画策している。近江朝廷は唐（その後援を受けた百済）への支援と再度の出兵計画を持っていたらしい<sup>（62）</sup>。天武朝には築城記事はないが、その後、大宰・総領制を進めていく中で、地方の支配拠点として取り上げられ築城工事を再開した城だけが整備されていく。

大宰・総領制は、吉備、周防、伊予という瀬戸内沿岸地域と筑紫地域で実施された「広域軍政」と考えられている。律令国を超えた数ヶ国を管轄する総領（大宰）が中央から赴任して、軍事力を背景にして国境画定や立評・評の分割統合、庚寅年籍の作成などを実施していった。その中で行政・軍事の拠点となったのが古代山城であつたらしい。この時点では羅唐戦争の行方も定かではなく、半島情勢の推移によっては戦乱が列島へ及ぶ危険も残っていた。天武5年（676）になって唐の旧百済地域からの撤退、大同江を休戦ラインとする形で半島情勢はようやく落ち着きを取り戻す。「政の要は軍事なり」の天武の言葉はこのような内外の施策を止揚したスローガンだったといえよう。

持統・文武朝段階では、将来どのような統治機構にするのか、模索が続けられたと考えられるが、大宝元年（701）の大宝律令で瀬戸内地域の大宰・総領制は廃止される。国制への以降は比較的突然の決定だったらしく、それを裏付けるように瀬戸内の古代山城では鬼ノ城以外の古代山城が整備途中で放棄されている。

鞠智城のある西海道地域は大宝律令下でも大宰府が存続したため、今暫く築城工事が継続された。これが北部九州に10ヶ所築かれた神籠石系山城と考えられる。文武2年（698）と同3年（699）に大宰府管内で山城の修築記事が出てくるのは、持統3年（689）の浄御原令施行に伴う筑紫大宰への位記送給と監新城からの一連の施策と思われる。位記送給は筑紫大宰の官人増加と機構改革、監新城は神籠石系山城築城開始、記録には漏れているが、対馬金田城の修築（城門を礎石建てに改築）もまさにこの時期に当たる。

### iii. 南九州問題と鞠智城

鞠智城を隼人対策の拠点と捉える考え方は、近年盛んに提唱されるようになったが<sup>（63）</sup>、698年の繕治記事の段階ではまだ少し早い感もある。筑紫大宰の南方進出は文武朝の南島覓国使派遣から始まり、700年頃から本格化する。薩摩隼人征討後の大宝2年（702）に薩摩国（唱更国）・多岐嶋が建国、和銅6年



(713)の大隅国建国後、養老4年(720)に今度は大隅で隼人の大反乱が起る。隼人の反乱には西海道の軍団兵士が動員されており、鎮圧軍の経路上に位置する鞠智城も活用されたと思われるが、兵員の滞在は一時的なもので城内に駐屯した痕跡はないことから、隼人対策だけを鞠智城修築の第一義的な要因とすることはできない。鞠智城修築を隼人対策と捉えるならば、同年の大野城や基肄城の修築も隼人対策となってしまうし、記録にはない金田城の修築はいったいどう解釈すればいいのだろうか。698年の繕治記事は西海道地域全体における大宰府体制の整備の一環として捉えるべきだろう。隼人反乱は720年を最後に収束したため、東北の城柵のような鎮兵の駐屯といった事態まで発展せず、南九州の情勢が落ち着いた8世紀初め頃(720年代)に鞠智城は一旦役目を終えたと考えられる。

鞠智城が再び文献記録に登場するのは天安2年(858)だが、この時は「菊池城院」「菊池郡城院」と呼称も変わっていた。この名称変更を根拠に管理主体まで肥後国や菊池郡とする意見もあるだろうが、そこまでは読み取れない。「菊池城」という名称を継続しつつ単に「城」ではないところに鞠智城の復興期の性格が表出されていると思われる。

## (2) 9世紀の鞠智城

### i. 新羅海賊と選士統領制

9世紀代の鞠智城については、「新羅海賊の来寇」<sup>(64)</sup>による新たな対外的な危機を背景として、鞠智城が重視されたという意見が多い。また「軍団制の廃止」から「選士統領(選士衛率)制」への軍制改革(826年)も軍事力の強化であると論じる説さえある。貞観11年(869)の博多湾での新羅海賊による貢船略奪や寛平5年(893)の有明海への侵入事件は、律令政府や大宰府の不安が現実のものになったといえる。しかし新羅敵視策は9世紀前半代に始まっており、統制貿易を建前とする律令政府にとっては東シナ海で活発化する新羅海商の活動そのものが危機感を抱かせる背景であった。

新羅海商の首領である張宝高と結んだ筑前守文室宮田麻呂の事件(841年)や大宰少貳藤原元利麻呂の新羅王と通じた謀反事件(858年)など、新羅海商の活動は地元大宰府の官人をも巻き込むものとなっていた。承和9年(842)以降の在留新羅人及び新羅商船敵視策が新羅海賊の実像であり、大宰府による統制貿易に対する九州の郡司・富豪層の急進的な動きは、貞観8年(866)肥前国基肄郡大領山春永を中心とする対馬奪取計画に至る<sup>(65)</sup>。

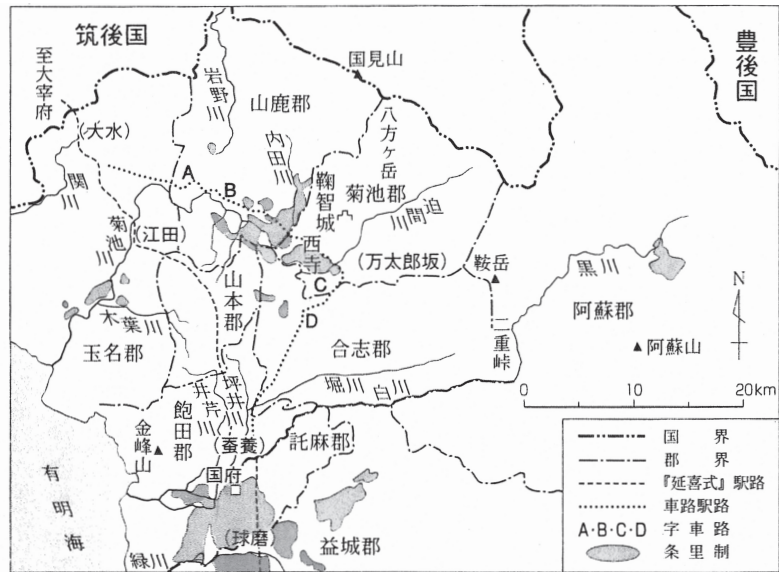
軍団兵士が戦闘の役に立たない状況下で、考え出されたのが選士統領制であり、「弓馬之士」を募兵するいわば政府直営軍から民間委託軍への移行といってもよい。人員的にも律令軍団にはとうてい及ばない少人数であり(813年の太政官符によると減定前の西海道六国の兵士数が17,100人に対して、選士は1,720人、衛卒200人で、およそ10分の1の規模)、博多湾や大宰府など要所を守衛することしかできない。期待された選士制だが、寛平年間の新羅船入寇では活躍せず、最終的に俘囚が配備されている。貞観18年(876)の「大野城の衛卒40人」という記録からすれば、交代勤務としても城内の主要な倉庫群の出入り口を守るのがやっとの人数だろう。この時点で維持されている大野城の城門は北の宇美口と南の太宰府口だけで城壁の維持管理などはもはやできない。我々がイメージする古代山城とはかなり異なる実態であったと推察される。もちろん、新羅海賊が博多湾などへ侵入したとしても大宰府の官民が大野城に籠城する必要などない。

### ii. 公営田制と大宰府・肥後国

鞠智城の議論の中では、9世紀代の西海道において連年凶作・飢饉・疫病が流行していたことは今まで論じられたことがない。9世紀初め頃からの未曾有の不作と飢饉に加えて疫病の流行によって、調庸の未納、

出挙稲の回収不能など律令財政の破綻が進行、死亡人口分田・絶戸田など班田農民を失った田畑が増加し、班田制への影響も看過できない事態になりつつあった。その対策として弘仁14年（823）小野峯守によって建議、実施に移された「公営田制」<sup>(66)</sup>こそ、9世紀～10世紀の鞠智城の存在意義を理解する重要な手掛かりだと思う。

公営田制は、財源獲得と窮民救済を目的として、大宰府管内九ヶ国の総田数76,587町の内、良田



第14図 肥後国北部の条里分布

12,095町を大宰府直営の公営田とし、そこからの収入をもって財源に充てるというものである。公営田耕作の労働力として、年間約6万人以上の百姓らを徭丁として動員し、耕作百姓は30日の耕作が義務付けられると共にその調・庸は免除された。公営田の収穫の中から、中央へ納入すべき調・庸や耕作百姓への人別米2升の食料・町別120束の報酬（佃功）、溝池修理料などが支給され、その残余がすべて大宰府や国衙の収入となった。大宰府管内の本来の正税額は約50万束であったが、公営田収入は100万束以上と本来の2倍となる計画だった。

筆者は2010年の古代山城日韓シンポジウム（高松市）で、大野城など九州の古代山城内の70棟にも及ぶ倉庫群について、「有事籠城用の兵糧」説を否定した<sup>(67)</sup>。このような稲穀の備蓄場所への転用説に対して、鈴木拓也は、一般に米は重貨であり、山の上に貯蔵するのは出挙などで出し入れする運用上の効率が非常に悪い。あえて山の上に貯蔵する目的は、籠城時の食糧を除外して考え難いと批判するが<sup>(68)</sup>、最近、赤司もこれらの倉庫の正体として「大宰府の独自財源」説を提唱している<sup>(69)</sup>。大野城の倉庫が奈良時代から平安時代にかけて徐々に増築されて現在のような姿になったことは、倉庫群の立地条件の変化から横田義章が早くに論じ、出土遺物から赤司が追認している<sup>(70)</sup>。

### iii. 9世紀代の社会不安

肥後は西海道諸国の中でも耕地面積が最も広く公営田計画の中心だった。公営田計画対象の12,095町の内、肥後では収穫量の良い上田ばかりを3,602町耕作することが特記されており、公営田全体の約30%を占めていた。筑前・肥前国などでは4年の試行で中断してしまったのに対し、肥後における公営田は成功し斉衡元年（855）にはその継続が申請され裁可されている。記録では弘仁14年（823）～天安2年（859）までの36年間が確認できる。貞観15年（873）、筑前で公営田の復活が許可されており、肥後でも9世紀末頃まで継続して経営されていた可能性は高い。公営田からの収入を郡衙ではなく何故鞠智城に運び込んだのか—この点については9世紀後半の社会不安を念頭に置かなければならない。それは富豪層による「私的経営」の激増と「群盗」の多発で、瀬戸内海では「海賊」も横行していた。大宰府管内の対馬と筑後では一種の反乱ともいえるべき国守襲撃事件まで発生している。天安元年（857）の対馬守立野正岑殺害事件と元慶7年（883）の筑後守都御西殺害事件で、組織化された武力に対して国衙が軍事的にいかにも弱体であるか暴露した<sup>(71)</sup>。このような群盗行為に対して城内であればある程度略奪などを防ぐ効果が期待されたとみたい。

大野城などで倉庫群をあえて山城内に設けた理由も倉庫の保全が背景にあったと思う<sup>(72)</sup>。

軍事力を強化するために倉庫を増築したり大型化するというのは、説明としてほとんど説得力がない。考古学的な事実としては、鞠智城が9世紀代に貯穀用の倉庫群として活用されていることであり、その背景として大宰府と肥後国を中心とする飢饉対策—公営田制があったと考えれば、鞠智城の倉庫群も理解できると思う。鞠智城の最後の姿は大農業経営の拠点であり、これは有名な米原の長者伝説に通じるものがある。公営田制は9世紀後半～10世紀にかけて崩壊していく律令体制を守る施策として登場する。そういう意味では9世紀の鞠智城も律令国家を守る「城」だったといえるだろう。

## 6. おわりに

鞠智城について、報告書『鞠智城跡Ⅱ』の調査成果に基づきながら、4つの変遷の画期とその時代的背景について素描を試みた。また他の古代山城の遺構・遺物とも比較を通して、鞠智城の特徴を洗い出すよう努めた。そのようなレビュー作業によって、鞠智城の遺構・遺物の特異性や他の古代山城との共通項がある程度整理できたのではないと思う。報告書の内容に異議を唱えている部分もあるがお許し願いたい。

これまでの鞠智城に関する議論はどちらかというと鞠智城及び肥後地域だけにとらわれがちであり、検討する射程もせいぜい西海道であった。また、古代山城＝軍事施設という理解から「戦争」や「対外的危機」といった事象に視野が向けられ過ぎていたと思う。今回の検討を終えて、鞠智城に関する問題の奥深さを認識すると共に、その多岐にわたる論点の存在に気づかされ、各時代の中でのエポックメイキングな変遷過程は研究課題としても興味が尽きない遺跡であることを教えられた。

今回の拙論も謎多い遺跡である鞠智城を理解するための一つの試論に過ぎない。今後も続く調査の成果に期待しながら、鞠智城とは何だったのか、という問いかけを続けていきたいと思う。

本稿をまとめるにあたっては、多くの方々にご教示いただき、資料収集や調査現場の見学などでお世話になった。記して感謝の意を表したい。敬称は省略させていただいた（五十音順）。

赤司善彦、稲田孝司、大橋雅也、小鹿野亮、小澤佳憲、小田富士雄、金田善敬、狩野久、城戸康利、北垣聡一郎、草場啓一、佐藤信、杉原敏之、鈴木拓也、鈴木靖民、田中淳也、田中正弘、寺岡洋、西住欣一郎、能登原孝道、仁科茂樹、乗岡実、松尾洋平、松波宏隆、村上幸雄、矢野裕介、山口裕平、山田隆文、山元敏裕、義則敏彦、渡邊誠、渡邊芳貴

## <註>

- (1) 向井一雄1991「西日本の古代山城遺跡—類型化と編年についての試論—」『古代学研究』第125号, 古代学研究会、註80)で、鞠智城の築城目的について触れ、「隼人対策などの国内的な築城目的を考える意見も多いが、筑肥山地を第2の防衛線とする構想を想定できるのではないだろうか。菊池川流域は豊後方面へも連絡できる要害地であり、鞠智城は大宰府陥落後の九州内の拠点として用意されたものとみておきたい」と見通しを述べている。
- (2) 坂本経堯1953「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就いて」『地歴研究』10—5（坂本経堯1979『肥後上代文化の研究』に収録）
- (3) 西住欣一郎1999「発掘から見た鞠智城—最近の調査成果から—」『先史学・考古学論究』Ⅲ, 龍田考古会
- (4) 岡田茂弘2010「古代山城としての鞠智城」『古代山城 鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社



- (5) 出宮徳尚1978「吉備の古代山城試論」『考古学研究』25-2, 考古学研究会
- (6) 多数の住民を避難・籠城させる大型の保民用山城は主に高麗時代以降造られている。それまでの山城は地方支配拠点の性格が強い。日本で半島の山城が紹介された1980年代に、日本の中近世の武士の城との対比のために前者のイメージが強調されたため、日本側では未だにそのイメージが払拭できていない。
- (7) 木下良1978「「車路」考—西海道における古代官道の復原に関して—」『歴史地理研究と都市研究』上巻, 大明堂
- (8) 鶴嶋俊彦1979「古代肥後国の交通路についての考察」『駒澤大学大学院地理学研究報告 地理学研究』第9号, 駒澤大学大学院
- (9) 2014年3月の特別研究成果報告会や2014年7月の鞠智城シンポジウム（東京）でもそのような論調が多くみられた。
- (10) 筆者は2010年3月の条里制・古代都市研究会「山城と都市・交通」で古代山城が国郡境に立地する事例を多数挙げて、古代山城が7世紀後半の地域編成に深く関係する遺跡であることを指摘した。乗岡実 2010「地域勢力と古代山城」『古代文化』62-2, 古代学協会、仁藤敦史 2010「七世紀後半の領域編成」『日本歴史』748
- (11) 対馬は古来より地形的に陸路よりも船による海上交通が発達しており、金田城は対馬最大の停泊地である浅茅湾を監視、有事の際は外国船団を船で襲撃する“海の要塞”であったと考えられる。
- (12) 向井一雄2001「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第9・10合併号, 古代山城研究会、向井一雄 2005「外城ラインに関する一考察」『戦乱の空間』第4号, 戦乱の空間編集会、外城を付属させる山城は高句麗地域に多い。
- (13) 百済の五方とは、軍政色のきわめて強い地方行政制度で、全国を五方（北方・西方・東方・中方・南方）に分けて各方の所在地を方城と呼んだ。徐程錫（天野良晴訳）2014「百済五方城の位置」『溝漣』15号, 古代山城研究会（初出は、徐程錫2002『百済の城郭—熊津・泗沘時代を中心に』学研文化社）
- (14) 註（12）向井2001文献
- (15) 日本の古代山城では、土塁内外の柱は対となり柱列間隔は1.6m（大野城）、1.8m（御所ヶ谷城）、2.1m（石城山城）など短いものもあるが、3m間隔の事例が多い。韓国では永定柱間距離が三国時代には1.2～1.8mだったものが統一新羅以降は3m以上と時代と共に長くなっていくと考えられている。向井一雄2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編, 奈良文化財研究所、註（12）向井2001文献
- (16) 内城域北側の城門については、谷川沿いよりもむしろ米原集落北東が適当ではないかと想像される。矢野裕介からも同様な教示を受けた。
- (17) 鶴嶋俊彦1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号, 古代交通研究会
- (18) 立石地名は、車路地名と同様に駅路に沿ってみられる駅路関係地名の一つである。実際に立石が現存する場合もある。木下良1976「「立石」考—古駅跡の想定に関して—」『諫早史談』第8号, 諫早史談会
- (19) 小澤佳憲の教示によると、軸摺穴内壁の赤色痕は錆（鉄分）ではなく、穴内に溜まった雨水によるものという。小澤佳憲2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」平成25年度鞠智城「特別研究」論文集『鞠智城と古代社会』第二号, 熊本県教育委員
- (20) 懸門とは、城門開口部に1.5m以上の大きな段差を設けて防御性を高めた城門の型式。朝鮮半島の古

代山城でよくみられる。平時には梯子などを掛けて使用する。

- (21) 鏡山猛1972「朝鮮式山城の倉庫群について」『九州考古学論攷』吉川弘文館、石田爲成2013「第2節 礎石建物について」『史跡 鬼ノ城2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236 岡山県教育委員会
- (22) 稲田孝司も同様な指摘をしている。稲田孝司2013「古代の都城・山城と鞠智城」『鞠智城跡「特別研究」成果報告会』予稿集
- (23) 金田城の建物には木柵が付属していることが多いが、建物ごとに一方向だけ設けられていることから風除け用の塀ではないかと思われる。
- (24) 津嶋知弘2014「古代城柵の城内竪穴建物－志波城内竪穴建物の集成とその性格の検討－」『学芸レポート』vol.00.3, 盛岡市遺跡の学びの館、志波城跡愛護協会・盛岡市教育委員会2014『志波城にいた人々の暮らし～竪穴建物について～』（平成25年度 志波城跡愛護協会 歴史講演会資料）、竪穴住居は2200棟とする推計もあり、中には工房的な性格のものもあったらしい。
- (25) 横田義章1983「大野城と基肆城」『佛教藝術』146号, 毎日新聞社、赤司善彦の教示によると、前田地区では村上恭通によって大量の鉄滓が採集されているという。
- (26) 燕岐・雲住山城にも八角形建物があるとされるが、同城の調査報告書や近年のシンポジウム資料などでは八角形建物の記述はなく、詳細は確認できない。二聖山城視察メンバー1992「[付論]韓国の二聖山城について」『鞠智城跡－第13次調査報告－（熊本県文化財調査報告第124集）』熊本県教育委員会、高正龍 1995「韓国古代山城」『古代文化』47-12, 古代学協会
- (27) 岡田英男 1993「八角円堂の平面と構造」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』
- (28) 豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会1996『市道遺跡』（I）豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集、栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団2001『那須官衙関連遺跡』VII栃木県埋蔵文化財調査報告第249集、条里制・古代都市研究会編2009『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣
- (29) 李陽浩 2004「古代の八角形建物にみる2種の平面形態について－近年分かった集安丸都山城と慶州蘿井の例を中心として－」『嶺南文化財研究』第17輯, 嶺南文化財研究院
- (30) 註（29）李文献
- (31) その他の作図方法として、八角形の一辺を元に描く方法がある。八角形の一辺の右(もしくは左)に隣接する二等辺三角形を描く(一辺の端から垂直に二等辺の一辺を描き、次に一辺に対して水平に二等辺の一辺を描くと、二等辺の底辺が定まる)、一辺の端から一辺の長さで円を描いて、二等辺三角形の底辺との交点を求めると八角形のもう一辺が定まる。あとはこれを繰り返していく。
- (32) 李京燮2013『新羅木簡の世界』景仁韓国学研究叢書110, 景仁文化社
- (33) 中山圭2005「鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一樣相－」『九州考古学』第80号, 九州考古学会、この瓦當接続技法は日本では特異だが、半島では比較的よくみられる技法の一つである。
- (34) 田中正弘2011「第1章 基山町内の遺跡－10こうらぎ瓦窯跡」『基山町史』資料編, 基山町
- (35) 比嘉えりか2008「新羅の瓦」『考古学ジャーナル』No.576, ニューサイエンス社、清水昭博2008「古新羅瓦の遡源に関する検討－有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として－」菅谷文則編『王儉と武器と信仰』同成社、亀田修一2006「第四章 北部九州の朝鮮系瓦－豊前地域を中心に－」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、趙源昌2006「鞠智城瓦當から見た新羅製瓦術の対倭伝播」『湖西考古学』第14輯、趙源昌は百済系の瓦當文様と認識されてきた鞠智城軒丸瓦について、7世紀第4四半期の新羅から日本への国家的な技術伝播を想定している。
- (36) 栗原和彦2001「大宰府出土瓦に見られる朝鮮半島統一新羅時代文化の影響」『九州歴史資料館 研究論集』26, 九州歴史資料館

- (37) 菅波正人1994「第7章まとめー2, 那珂遺跡出土の古瓦について」『那珂』10(32次・34次調査報告)福岡市教育委員会, 1990『那珂』2, 福岡市教育委員会, 1995『井尻B遺跡』2(第3次調査報告)福岡市教育委員会, 2004『井尻B遺跡』12(第17次調査(A・E・F区)報告)福岡市教育委員会、那珂遺跡や井尻B遺跡ではこれらの瓦を使用した建物は未確認であるが、記録にみえる那津官家や磐瀬宮(長津宮)、石瀬駅などの所在地に比定される。
- (38) 梶原義実2009「第1章 7世紀における造瓦組織の発展」『国分寺瓦の研究ー考古学からみた律令期生産組織の地方的展開ー』名古屋大学出版会
- (39) 凸面条痕文の類例については、『鞠智城跡』1983年で既に指摘がある。岩永省三1982「Ⅲ出土遺物の報告ー1.瓦類」『法隆寺発掘調査概報』I、吉岡康暢1974「第三章 歴史時代ー第一節 稲舟古窯址」『輪島市史』資料編第二巻(考古・古文献)今年初め、稲舟窯跡の所在が判明し、金沢学院大学が調査を開始している。
- (40) 齋部麻矢2010「第11節考察11-6 出土瓦について」『特別史跡大野城跡整備事業V平成15年7月豪雨災害復旧事業報告(福岡県文化財調査報告書第225集)』下巻,福岡県教育委員会
- (41) 松尾洋平の教示によると、鬼ノ城城内では若干の瓦が表採・出土しているが、時代は平安期で山城の礎石建物に伴うものではなく、廃城後の山岳寺院の建物に使用されたものと考えられるという。
- (42) 小笠原好彦2009「発掘された遺構からみた郡衙」『日本古代の郡衙遺跡』条里制・古代都市研究会編,雄山閣
- (43) 赤司善彦2013「鞠智城の築造時期と貯水地について」鞠智城シンポジウム2012成果報告集『ここまでわかった鞠智城(熊本会場・福岡会場)』熊本県教育委員
- (44) 横田賢次郎1983「福岡県内出土の硯について」『九州歴史資料館 研究論集』9,九州歴史資料館
- (45) 李成市2006「東アジア辺境軍事施設の経営と統治体制ー新羅城山山城木簡を中心にー」『古代文字史料の中心性と周縁性』,春風社
- (46) 山寺の墨書土器については外部からの搬入品とする見方が多い。田平徳栄 1983「基肄城考」九州歴史資料館開館十周年記念『大宰府古文化論叢』上巻,吉川弘文館
- (47) 小郡官衙や大宰府藏司遺跡では大量の鉄鏃や甲冑の小札が出土している。
- (48) 註(1) 向井1991文献
- (49) 熊本県教育委員会2001『瀬戸口横穴墓群・深川遺跡(熊本県文化財調査報告第193集)』、岩橋由季2011「九州北部の横穴墓における形態的類似とその背景」『九州考古学』第86号,九州考古学会、松本健郎1982「中九州の横穴」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』下巻,森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- (50) 池上悟1988「横穴墓の被葬者と性格論」『論争・学説 日本の考古学』第5巻 古墳時代,雄山閣出版
- (51) 熊本県教育委員会1977「Ⅱ各地の条里復元1菊鹿盆地の条里」『熊本県の条里(熊本県文化財調査報告第25集)』
- (52) 小田富士雄1977「百済系単弁軒丸瓦考」『九州考古学研究・歴史時代篇』
- (53) 政庁第I期古段階が白村江直後の時期とされているが遺構は僅かで、7世紀末の新段階になって遺構が増加することから、現在の大宰府政庁周辺の整備が本格化するのは7世紀末以降ー689年の筑紫大宰への位記送給の時期と考えられる。
- (54) 村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り(吉備考古ライブラリ2)』吉備人出版
- (55) 南山新城の第1碑十一歩三尺八寸(約16.7m)、第2碑七歩四尺(約11m)、第3碑二十一步1寸(約



- 30m)、第9碑6歩(約8.6m)と、工区によってある程度バラツキはある。
- (56) 明活山城作城碑や南山新城碑は、工事に参加した人物の出身地や名前、職能などを記した石碑で、城を築いた時、碑を建てるのは、工事に対する責任を明らかにするためのもの。碑文には「受作」となっているが、細かい寸単位まで記されていることから、工事完了後に工区を測って石碑に刻んだと考えられる。篠原啓方2014「南山新城碑研究の軌跡」『東アジア文化交渉研究』第7号、朴方龍1988「明活山城作成碑の検討」『美術資料』第41号
- (57) 鈴木靖民2011「第三章 七世紀後半の日本と東アジアの情勢—山城築造の背景—」『日本の古代国家形成と東アジア』,吉川弘文館
- (58) 2014年3月の特別研究成果報告会でも同様な見解が多かった。
- (59) 大宰府政庁周辺官衙（不丁地区）出土木簡によると、基肄城の備蓄米を筑前・筑後・肥等の国に分け与えるように大宰府が命じている。九州歴史資料館2010九州歴史資料館開館記念特別展『大宰府—その栄華と軌跡—』図録
- (60) 赤司善彦2014「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を中心に—」高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』2 原始古代の考古学, 中国書店
- (61) 出宮徳尚1984「古代山城の機能性の検討」小野忠熙博士退官記念論集『高地性集落と倭国大乱』雄山閣
- (62) 倉本一宏1997『日本古代国家成立期の政権構造』吉川弘文館
- (63) 2014年7月の鞠智城シンポジウム（東京）では、吉村武彦によって鞠智城や三野・稲積城に対して「南九州型城柵」という新たな類型が提唱されている。
- (64) 平野邦雄1970「新羅来航の幻影」『古代の日本』3 九州, 角川書店
- (65) 平野博之1991「在地勢力の胎動と大宰府支配の変容」『新版[古代の日本]③九州・沖縄』角川書店
- (66) 西別府元日1987「公営田政策の背景」田村円澄先生古稀記念会編『東アジアと日本』歴史編, 吉川弘文館、西別府元日1991「九世紀の大宰府と国司」『新版[古代の日本]③九州・沖縄』角川書店、板楠和子1999『熊本県の歴史』山川出版社
- (67) 向井一雄2010「北部九州の古代山城」『古代山城 日韓シンポジウム資料集』高松市教育委員会、3×5間倉庫の貯穀量はおよそ3000~5000斛(石)で、1斛=成人男子が1年間に食べる米の量であるので、1万人が籠城するとしても約20年分の備蓄となる。
- (68) 鈴木拓也2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』第26号, 条里制・古代都市研究会
- (69) 註(60) 赤司2014文献
- (70) 横田義章1983「大野城の建物」九州歴史資料館開館十周年記念『大宰府古文化論叢』上巻, 吉川弘文館、註(60) 赤司2014文献、註(40) 齋部2010文献
- (71) 木村茂光2004「10世紀の転換と王朝国家」『日本史講座』第3巻 中世の形成, 東京大学出版会、註(65) 平野1991文献、下津間康夫1987「9・10世紀の海賊」『山城志』第9集, 備陽史探訪の会
- (72) 赤司は山城内への倉庫設置を“リスクマネジメント”と評している。ただし大野・基肄城の城内倉庫建設は8世紀中には始まっており、3×5間など規格性の高い瓦葺きの倉庫群が造られている。これに対して鞠智城の場合は9世紀代に倉庫群建設の中心があり、瓦葺きでもないのにより郡衙的な様相を呈している。

<引用・参考文献>

- 池上 悟2000『日本の横穴墓』雄山閣
- 上田 篤1996『五重塔はなぜ倒れないか（新潮選書）』新潮社
- 上原真人1997『瓦を読む（歴史発掘11）』講談社
- 愛媛県西条市教育委員会2012『史跡永納山城跡Ⅱ－内部施設等確認調査報告書－（西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集）』
- 大川 清1996『古代のかわら』窯業史博物館
- 金田一精1997「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』第10号,肥後考古学会
- 狩野 久2010「瀬戸内古代山城の時代－築造から廃止まで－」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざままで－』
- 木村龍生2011「鞠智城跡の古墳時代後期後半の集落について」『熊本古墳研究』第4号,熊本古墳研究会
- 九州国立博物館2010九州国立博物館大宰府学研究講演会『展望・大宰府研究－藏司跡の調査から－』
- 九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』吉川弘文館
- 熊本県教育委員会1983『鞠智城跡（熊本県文化財調査報告第59集）』
- 熊本県教育委員会1995『鞠智城跡－第16次調査報告－（熊本県文化財調査報告第152集）』
- 熊本県教育委員会1996『鞠智城跡－第17次調査報告－（熊本県文化財調査報告第157集）』
- 熊本県教育委員会1997『鞠智城跡－第18次調査報告－（熊本県文化財調査報告第164集）』
- 熊本県教育委員会1998『鞠智城跡－第19次調査報告－（熊本県文化財調査報告第169集）』
- 熊本県教育委員会2009『鞠智城跡－総括報告書－（熊本県文化財調査報告第249集）』
- 熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館2011『鞠智城とその時代－平成14～21年度「館長講座」の記録－』
- 熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－（熊本県文化財調査報告第276集）』
- 熊本県教育委員2013平成24年度鞠智城「特別研究」論文集『鞠智城と古代社会』第一号
- 熊本県教育委員会2014a『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』
- 熊本県教育委員2014b平成25年度鞠智城「特別研究」論文集『鞠智城と古代社会』第二号
- 清水昭博2012『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂出版
- 順天市・順天大 schools 博物館2004『順天 剣丹山城Ⅰ』
- 高木恭二2012「菊池川流域の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集
- 玉名市立歴史博物館ころピア1997企画展『玉名郡衙』
- 鶴嶋俊彦1991「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学（肥後考古第8号・三島格会長古稀記念）』肥後考古学会
- 鶴嶋俊彦2011「古代官道車路と鞠智城」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版
- 出浦 崇2009「古代佐位郡と三軒家遺跡」『國史學』第198号,国史学会
- 壇国大 schools 中央博物館・利川市1999『利川 雪峰山城一次発掘調査報告書』
- 中村明蔵2001『隼人の古代史（平凡社新書119）』平凡社
- 漢陽大 schools 1987『二聖山城＜発掘調査中間報告書＞』
- 漢陽大 schools 1988『二聖山城＜二次発掘調査 中間報告書＞』
- 平野敏也・工藤敬一責任編集1997『図説 熊本県の歴史（図説日本の歴史43）』河出書房新社
- 福岡県教育委員会1979『特別史跡大野城跡Ⅲ 主城原地区発掘調査概報・整備概要（1）』

直木孝次郎・小笠原好彦 編著1991『クラと古代王権』ミネルヴァ書房

長崎県美津島町教育委員会2000『金田城跡（美津島町文化財調査報告書第9集）』

長崎県美津島町教育委員会2003『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ（美津島町文化財調査報告書第10集）』

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1999春季特別展『蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』

野田嶺志1980『防人と衛士－律令国家の兵士（教育社歴史新書〈日本史〉26）』教育社

山内邦夫1983「選士制とその周辺」遠藤元男先生頌寿記念論文集『日本古代史論苑』国書刊行会

山中敏史1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

#### <挿図出典>

第1図 熊本県教育委員会2012文献

第2図 熊本県教育委員会2012文献に加筆

第3図 註（17）鶴嶋俊彦1997文献

第4図 熊本県教育委員会2012文献

第5図 熊本県教育委員会1997文献

第6図 熊本県教育委員会1992『鞠智城跡－第13次調査報告－（熊本県文化財調査報告第124集）』

第7図 出浦崇2009文献、註（28）豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会1996文献

第8図 熊本県・熊本県教育委員会2010鞠智城 東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考えるⅡ 東アジアの古代鞠智城『鞠智城の調査成果』

第9図 註（36）栗原和彦2001文献

第10図 熊本県教育委員会2012、註（39）文献

第11図 熊本県教育委員会2012文献

第12図 註（12）向井一雄2001文献に加筆

第13図 註（21）岡山県教育委員会2013文献

第14図 板楠和子1999『熊本県の歴史』山川出版社